
覇者の印

Z - 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覇者の印

【Nコード】

N8791B

【作者名】

Z-1

【あらすじ】

ある日・・・世界は魔王遠呂智によって一つにされた。各世界の猛将や戦士達は次々と遠呂智に敗北し、遠呂智の軍に取り込まれていった。圧倒的な武力により各地の統一が進んでいく中で、遠呂智に抵抗する者達が立ち上がった。

始まり〜承太郎とクリリン〜

ある日、突然世界に姿を現した魔王遠呂智・・・。

遠呂智は最強と呼ばれた各世界の猛者達の世界の時空を融合させ一つの世界に集めた。そして軍師妲己の知略を使い、猛将や各世界の戦士達を仲間に取り入れた。中には謀反を起こすモノもいたが、遠呂智の圧倒的な戦術と武力に儆く散っていった。

「ここは・・・一体どこだ？」

承太郎はヒトデを海岸に探しに来ていた時に、急に目の前の海岸が歪み吸い込まれるように連れてこられた。辺りを見渡して見るが、これといって見覚えのあるモノがなく、空も見覚えのない紫の空だった。

「こいつは、何者かのスタンドの能力か？」

ドーン・・・。遠くで何かの爆発音がした。そしてその音の後に一人の青年が空を飛んできた。

「くっそ！！なんだってんだ！？あの軍勢は・・・ん？あんな所に人？おい！！」

承太郎は警戒した。なにせ相手は丸坊主な頭に点が六つもついていて、やけに筋肉質な身体を持っていたからだ。

青年は承太郎の少し前に降りると承太郎に歩み寄ってきた。

「おいっ！それ以上は俺に近づくんじゃねえぜ！！」

承太郎が警戒の言葉を出すや青年は気にせずそのまま近づいてくる。

「敵意はないようだが・・・。【スタープラチナ】！！ザ・ワールド！！！！」

承太郎の隣りに少し変わった格好の男が姿を現すと、青年の・・・いや承太郎以外の全ての動きが止まった。承太郎は青年の後ろに回り

込むと、青年や他のモノもまた動き出した。

「な・・・！？いつのまに後ろに？」

青年は振り向きもしないで承太郎が後ろにいることに気がついた。

「俺は殺気を消しているのになぜ後ろにいると分かった？・・・おつと！そのまま話すんだ。動けば俺の【幽波紋】（スタンド）で背骨を折らせてもらう」

青年の背中がピクツと動く。

「ま、待てよ！俺の名前はクリリンって言うんだ。あんたも変な歪みに吸い込まれてここに来たんじゃないのか？」

承太郎はその言葉を聞いてスタンドをしまう。

「どうやら、てめえも俺と同じのようだな・・・さっきの爆発音は何だ??？」

クリリンはおそろおそろ振り返ると、承太郎のヘソが目の前にあり驚いた。

「でっけえ・・・。ああ、それは俺がこっちに飛ばされてしばらく辺りをうろついてたら、んゝ二千か三千くらいの兵隊が急に現れて襲いかかってきたんだ」

承太郎は衝撃を受けた。このクリリンの話すことが真実ならこの男は三千近くの兵士を相手に戦い逃げてきたのだから。

「それである爆発音の原因は？」

「俺のかめはめ波だ」

「かめはめは？」

クリリンはそっかと言うとと静かに気を集中させた。

「かゝめゝはゝめえ・・・波あああ！！！」

上下対称に構えた手から青白い閃光が飛び出した。そしてそれは遠くへとあつという間に姿を消した。

「こんな感じに気を集中させて出来るヤツだ」

クリリンが至極当然のように扱う気というものを見て承太郎は続けて衝撃を受けた。

「スタンドとは違うのか？」

承太郎は自分のスタープラチナを出すとクリリンの前に立たせた。

「スタンド？なんだ？あんたの気が急激に上がったけど・・・」

承太郎はそれを聞くとスタンドをしまい、クリリンに説明を始めた。
「スタンドとは違うのか・・・。スタンドは特定の人間が持つ守護霊みたいなものだ。スタンドにはいろいろな種類があり人型であったり、銃であったりとそれぞれ形や見た目が違う。そしてスタンドはスタンドを扱うモノにしか見えない、スタンドはスタンドでしか倒すことも出来ない、スタンドが受けた傷は持ち主にも現れる。最大のポイントは、スタンドにはそれぞれ特有の能力があり俺の場合は時を一定時間とめる事ができる。以上を覚えておけ・・・ついでに俺の名前は空条承太郎だ。」

クリリンは先ほどの一瞬で後ろに回られたことを小さく納得すると、急に横を向いた。

「承太郎さん・・・ここにももうすぐ沢山の兵士達がやってくる！！小さいのが五百とバカでかい気が2つです」

承太郎はクリリンの能力が凄まじいモノだと悟ったと同時にかなり頭が切れる男だと分かった。

「後どれくらいでこっちに姿を現す？」

クリリンが神経を集中させる。

「あと・・・十分くらいかな。だけど悪い気じゃないみたいだ。話せば分かるかもしれない」

「そんなことまで分かるのか？お前以外にも同じ能力を持つモノはいるのか？」

クリリンはその言葉を聞いて苦笑いをした。

「いますよ。こっちの世界に来たかわからないけど、俺以上に使えるヤツもいる。近くにいればすぐに誰だかもわかる。・・・それに一人だれだか分かるヤツが来た・・・最悪だ」

クリリンは上を向いた。

「ほーほっほー！！久しぶりですね？クリリンさん。あなたも不

運ですね？また私に殺されるなんて」

白く小柄な身体ではあるが、その身体からは溢れんばかりの闘争心が滲み出ている。

「フ、フリーザ！！？」

「丈助！？」

承太郎からも驚きの声が上がった。フリーザの隣りにいたのは承太郎の甥っ子で数年前に一度共に杜夫町を救った男がいたのだ。

「クリリン、白い方はわからねえが丈助は仲間だ。」

その言葉に丈助が口を開いた。

「なに言ってるんスか？俺はもうかなりプツン来てるんだ！！あんたにはうんざりしたよ承太郎さん！！とりあえず、あんたら二人には消えてもらうツスよ」

クリリンはすでに気を解放していたが、承太郎は丈助の言葉の意味がわからずに油断していた。クリリンがそれに気づき頭の中で練っていた作戦を瞬時に変えた。

「太陽拳！！！！」

「ぐぬう！！！！」

フリーザと丈助はまぶしさに目をやられてしまった。しばらくたち視力を回復したが、そこには二人の姿はなかった。

第1話：承太郎VS丈助&旦己

「承太郎さん！！あんた何をやってるんだ！あと0.1秒遅かったら確実にフリーザーに殺されてたんだ！！」

10分ほど承太郎を連れて逃げたクリリンは岩場の影で承太郎を叱咤した。

「ああ…すまん。しかしどういことなんだ…？丈助の野郎が俺を殺そうとするなんて」

承太郎は元は冷静沈着な男だが、今回に限っては動揺を隠しきれなかった。クリリンは黙って背中を向けた。これから何が起こるか想像もつかない、そのためクリリンは精神を集中してあたりの気を探っていた。

「ふう…しかし、あいつが俺を殺す気で来るならこつちも全力でやらないと負ける…。クリリン！あたりに何か気になるものはあったか？」

その言葉と同時にクリリンは承太郎に怒鳴った。

「気配を消すんだ！！あの二人がこつちに来る！！」

ゾクリ…、承太郎にも分かった。フリーザーと言うヤツの圧倒的な力と丈助の憎悪の力が背筋を凍らせた。目の前にいるクリリンもブルブルと震え上がった程だ。

「くっそ…ダメだ！バレル！！承太郎さん！！気を解放するんだ！！」

クリリンが怒鳴った瞬間、クリリンを中心に波動が現れ青白いオーラが現れた。

「（気を解放する…？さっきスタンドを出した時に気が急激に上がったとか言ってたな）『スタープラチナ』！！」

岩場の間から空を見上げると、そこには先ほどの二人の姿があった。そして二人はこちらを見ると嬉しそうに笑った。

「来るぞっ!!」

シャッ!!クリリンとフリーザーが同時に消えた。

「速い!?!」

承太郎は二人を目で追うことが出来ない。かろうじてスタープラチナの精密な目で追うことが出来るほどだった。

「あんたの相手はオレツスよ?ドラドラドラ!!」

二人の動きに完全に目を取られていた。注意力が散漫だった…。無論、丈助のスタンド【クレイジー・ダイヤモンド】のスピードとパワーはそんなことでかわせるはずがない。

「くっ…ザ・ワールド!!」

承太郎が止められる時間は4秒ほど、だがスタープラチナで攻撃をかわすし反撃をするには十分な時間だった。

「悪いな…丈助!オレも今はまだ負けられないんだ。オラオラオラオラオラオラオラアア!!」

クレイジー・ダイヤモンドの身体がスタープラチナの破壊力で歪む。4秒が経過した。

「ごああ!が…はっ…」

丈助がおもいつきり岩に激突して血を吐く。承太郎はその機を逃さない、ゆらりと丈助に近寄る。ゾクリ…スタープラチナの射程範囲外ギリギリの場所で、とてつもない殺気を感じ承太郎は止まった。

「ん…、やっぱり今の丈助ちゃんじゃ勝てないかあ…。帰って修行してきてねえ?」

丈助のそばに一人の女が現れた。そして丈助をなんらかの呪文で消すと、承太郎の方に向き直った。

「(こいつ…いつ現れやがった…これほどの凄まじい殺気…。少しやばいかもな)」

「ねえ?いい男じゃない!あなた遠呂智様のところにスカウトされない?」

女は無防備のまま承太郎の側に近寄ってきた。

「生憎だが、オレはオヤジだか遠呂智だかわけのわからんヤツに付いていく気はない」

承太郎は女が伸ばしてきた手を払いのけるとスタープラチナを出した。

「ええゝ？強そうなスタンド持つてるのに勿体ないなあ…。まあいいや！じゃああたしが遠呂智様の圧倒的な力を教えてあげる！」

承太郎は時を止めることすら出来なかった。女から繰り出される、完璧で妖艶でとてつもない威力の技に為す術がない。

「ぐううう…。（こいつはまずい…時を止める隙さえない！）」

スタープラチナの防御にも限界が見え始める。女は未だに攻撃の手を緩めることがない。きつと承太郎が遠呂智に屈するか、死ぬかのどちらかでしか攻撃をやめないだろう。

「鬼…か？」

承太郎から突然出た言葉に女が反応する。承太郎はそれを見逃さなかった。

「ザ・ワールド！！倍にして返してやるぜ…オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアア！！！！」

そして距離をとる。4秒が経過しまた時が動き出した。

「きゃあああ！いったあゝい…！！もうなんなのよ！」

軽く吹き飛ぶと承太郎を睨む。女はケロツと普通に立ち上がった。

「てめえ…化け物か」

「失礼ね！！もお殺しちゃうからね！！」

フツ…女が消えた。先ほどのフリーザーやクリリンの比ではない。

スタープラチナの目でも全く追えなかった。

「じゃあゝね？さよならゝ」

いつの間にか目の前に現れて、すでに承太郎の頸動脈に狙いを定めていた。

「（オレもここまでか…こいつら…強すぎるぜ）」

承太郎は死を覚悟した。ここまで圧倒的な戦いはあのディオですら

なかった。…が、女の手が首元でピタリと止まった。

「姐己よ。早急に城へ戻るのだ。さっさと孫呉を落とさねばならぬ」
どこからともなく聞こえる声に姐己が始めて焦りの表情を浮かべる。
そして頸動脈付近にある手を引いた。

「やっぱあゝい。怒られちゃう！もお！あなたのせいだからね！！
それと遠呂智様は鬼じゃないわ、神よ！ウフフ、それじゃあね」
姐己と言う女は承太郎から離れるとさっさと消えてしまった。

「…今のオレでは話しにならないようだぜ…。こんな屈辱は初めてだぜ」

承太郎は人生で初めての無力感を味わった。

第2話：クリリンVSフリーザ…修羅現る

承太郎が丈助と戦闘を始めたとき、クリリンとフリーザは少し離れた場所に移っていた。

「なんで生きてるんだよ…。悟空が倒してトランクスが殺したろ」
その言葉を聞いてフリーザの顔に青筋が浮かんた。

「そうだ！オレはそいつらに殺されたんだ！貴様を殺したら次はあいつらをぶっ殺してやる！！」

ゴゴゴゴゴ…。急にフリーザを中心として大地が響き始めた。

「く…相変わらず凄まじい気だ…。けど、オレだってお前と闘った後の5年間をムダにしていたわけじゃない！！」

クリリンも負けじと気を一気に解放させた。ぶつかり合う巨大な気はしばらく膠着状態になった。

「きえええええ！！」

先に動き出したのはフリーザだった。一瞬にして間合いを詰めての右回し蹴り、クリリンはそれを見極めて左腕で綺麗にさばく、フリーザの右回し蹴りから一回転をしながら下ろした右足を軸に左の後ろ回し蹴りを放つ。クリリンはそれも読んでいたのか、すでに残像で消えていた。

「波ああ！！」

フリーザの後ろをとってかめはめ波を放つ、フリーザは紙一重でそれを飛んで避けるがクリリンの追撃が来た。

ズババババツ！！

クリリンの手から何発ものエネルギー弾が放たれた。フリーザにはそれを避ける程の余裕がなかった。

「くっそー！！こんなものおー！！」

ズガガガガン！！

一気に煙が巻き起こった。クリリンは後退し間合いを空けて様子を見てみた。

「ぐ…貴様ああ…ゆ、ゆるさんぞおお!!」

フリーザが両手を真上にあげた。そしてそこに一気に気が集中し始めた。

「な…すごい気だ…。こんなの打たれたら承太郎さん達まで巻き込まれちゃう…」

エネルギードンドン膨れあがっていく、フリーザの顔は怒りから勝利の表情に変わっていった。

「鬼…」

クリリンがフリーザの方を見て一言呟いた。それは承太郎が言った言葉と同じ事だった。

「鬼？オレがか？オレは王だ!!宇宙最強の!!ハアハッハッゴアア!!」

フリーザが急に吹き飛び岩場に突っ込んだ。そしてフリーザがいた場所には一人の男が立っていた。

「あいつが遠呂智のねずみだよな？お前らを勝たせてやるよ」

男はニヤリと寒気を感じるほどの笑みを浮かべると、フリーザの突っ込んだ場所に目をやった。

「さ、さつきから…ハアハア…オレを…舐めやがってええ…」

フリーザが崩れた岩山から出てきた。不意打ちとは言えかなりのダメージを受けてしまったフリーザだが、舞空術をうまく使い一気に男との距離を詰めた。

「まずは貴様からだ!!死ねえ!!」

左胸と首を狙い拳を突き出すフリーザ、しかし男はそれをかわすとフリーザの脇に肘をはめながら片方の手で腕を取ると、瞬時に足を払い投げた。

「ふうおお!!?」

やられているフリーザでさえ何をされたのかわからなかった。そして地面に付く瞬間に男はフリーザの頭めがけて蹴りを出した。

「(頭…蹴られ!!?ヤバ…死ぬ!!!)」

ゴキイーン！！

凄まじい轟音とともにフリーザが宙を舞ってドサリと地面に落ちる。

「陸奥圓名流”雷”^{いかづち}」

男はすでにフリーザが息絶えてると分かるとクリリンの方をみてそう言った。

「陸奥…？鬼かと思ったぞ…」

クリリンは呆気にとられてしまいうまく言葉を返すことが出来なかった。あのフリーザを一瞬で投げ蹴り殺してしまったのだ。

「ああ、陸奥の一族には修羅の血が流れている。鬼と思うのもおかしくはない。陸奥の一族は遙か昔から歴史の裏で動き回る…。無手最強の殺人術の使い手だ」

陸奥と名乗る男は驚くクリリンをそっちのけで説明していく。そして、クリリンはやっと正気を取り戻すとやっとともに尋ねることが出来た。

「オレの名前はクリリンって言うんだ…。あんたの名前はなんだ？あんたも違うところから飛ばされてきたのか？」

「まずは名前から答えよう。オレは陸奥^{むつ} 八雲^{やくも}だ。そうだな…オレの双子の兄弟がオレをここに呼んだみたいだな」

「ひえー、あんたみたいのがもう一人いるのか？心強いというか…何というか…」

クリリンの言葉に八雲は表情を曇らせた。

「あいつは…たぶん遠呂智を勝たせようとしているはずだ…。あいつは優しいすぎる、相手の心の深いところまで見つけてそれを守ろうとしているんだ」

クリリンは今までのことを頭の中で整理しようとした。承太郎さんはスタンドという能力を持ち、陸奥圓名流というものは遙か昔から暗躍する無手の殺人術の使い手で、遠呂智の方にも一人使い手がいるということだ。

「遠呂智についてる陸奥は…なんて名前なんだ？」

「虎…いや、不破だ」

「そうか…これからオレはどうなるんだ…？とりあえず承太郎さんのところに戻るか…」

クリリンはこれからのことを考えながらとぼとぼと八雲と一緒に承太郎の元へと向かった。もうすぐ側に五百の軍勢がいることも忘れながら…。

第3話：分かれ道

「承太郎さん！大丈夫ですか？」

岩に寄りかかるように座り込むボロボロの承太郎を見て、クリリンが慌てて承太郎に駆け寄った。

「ああ… なんとかな。変な姐己とか言う女が現れて丈助を逃がしやがった…」

承太郎はクリリンの後ろに立っている八雲を睨みながら言った。

「姐己…？承太郎さんはもしかしてそいつにやられたんですか？」

「ああ…とにかく強かった。オレは手も足も出せなかった…。今の俺たちじゃ絶対に遠呂智に勝つことが出来ないぜ…」

承太郎の言葉を聞いて八雲が静かに口を開いた。

「姐己…。ヤツは遠呂智のもつとも信賴する部下だ。大体は軍師として戦いに参加することはないんだがな…」

承太郎は八雲に対する警戒心を強めた。

「何で、てめえはそんな詳しい情報をしってやがる…。俺たちと同じように飛ばされてきた人間じゃないのか？」

「確かにオレも飛ばされてきた人間だが、お前らと比べると相当前にこっちに来了。軽く三年も前にな」

「三年！？そのときから遠呂智は既にこっちで世界の統一を進めてたのか…」

クリリンが焦った理由は、三年以上前にこっちでの支配を進めていると言うことは、すでにある程度の力が遠呂智には備わっており、この世界の新参者である自分たちはそれにたいして抵抗をするということだからだった。

「こ、これじゃあまるで、袋のねずみじゃないか…。俺たちだけで勝てるはずがない」

しかし、クリリンに対して承太郎は焦っている様子はあまりなかった。

「そうでもないようだぜ？こいつが俺らの仲間だしたら、遠呂智共のことを一人でこれだけ情報を集めることは不可能に近い。だとしたら、こいつはどうやって情報を集めた？」

承太郎に言葉にクリリンから焦りの表情が薄くなった。

「仲間がいるんだ！遠呂智軍内部にもそして抵抗勢力にも！！」

八雲は承太郎の切れる頭に驚くと、また口を開いた。

「そのとおり、承太郎の言っていることはほぼ合っている。遠呂智軍内部に進入させているのと抵抗勢力…合わせると今のところは3000程の勢力になる」

「3000もいるのか！？だったら勝てるかもしれな…」

八雲は目でクリリンを制すると話しを続けた。

「最後まで聞け、それにたいして遠呂智の軍勢は1000万を軽く越えているさ。3000で勝っているなら、お前らがここに来た頃には終わっている」

承太郎とクリリンはあまりの衝撃に声がしばらく出なかった。承太郎も最悪でも勢力差は3：7くらいだと思っていた。しかし、現実には八雲のいる軍勢で3000程度だったのだ。承太郎は他にも抵抗勢力はあると考えているが、この場合いたとしても500、300、多くて1000程の小さいところがいくつか在るだけだろうと確信した。

「まさに最悪だぜ…。だがオレは遠呂智とか言うふざけたヤツに加わる気はないぜ！この空条承太郎…。お前達に協力しよう」

八雲は待っていましたというように承太郎に笑むと視線を移してクリリンに目を向けた。クリリンは遠呂智が悪だと分かっているが、あまりの戦力差にどちら側に付くか迷った表情で俯いていた。

「…迷う…か。別に無理に俺たちに付けとは言わない。遠呂智に付くのも自由だ。俺たちは今から拠点に向かう、来るなら歓迎するぜ？じゃあな」

そういうと八雲は踵を返して振り返ることなく歩き出した。承太郎も歩き出すと少し離れたところで立ち止まり、振り返ることなく言

った。

「待ってるぜ」

八雲と承太郎をそのまま見えなくなるまで見送ったクリリンは、自分の小心を悔やんだ。しかしクリリンは八雲達とは逆の方向へ歩いていった。

第4話：八雲VS真田&趙雲（前書き）

重大なミスがありました。

修羅の刻から使わせて頂いた。陸奥八雲ですが、双子の兄弟がいるというのは、八雲ではなく狛彦でした。

本は読んだのですが、最後に狛彦が父親から八雲と名を貰ったのと勘違いをしていました。

しかし、ここから帰るのはどうかと思ったので、修正は無しとのこととさせて頂きます。

修羅の刻を支持される方々には大変申し訳ないのですが、なにとぞご了承ください。

第4話：八雲VS真田&趙雲

「空条承太郎か…長い名だな？それに言いにくい…。なにか略し方はないのか？」

八雲は承太郎と並び歩きながら突然そう言い出した。承太郎はその言葉を聞いて、昔に仲間達とアフリカへ行った時のことを思い出した。

「あいつらは…オレのことをジョジョって呼んでたぜ」

八雲はそうかと納得すると後ろを見た。承太郎も遅れて異変に気づき、スタープラチナを出して後ろを見た。

「ジョジョもなにか分かるのか？」

八雲は神経を研ぎ澄ませた目つきで承太郎に聴いた。承太郎はスタープラチナの超精密生の高い目で遠くのものを見てた。

「ああ…500〜700くらいか？そのくらいの数が一気にこつちへ押し寄せてきてる。こいつはさっきクリリンが言ってたヤツのようだ。どうする？」

このまま二人が全力で走って拠点へと逃げれば、追いつかれることはない。しかしもし奴らが遠呂智の兵ならば、抵抗勢力の拠点を教えてしまうことになる。

「もちろん…ここで潰させて貰う」

八雲はざらりと目を輝かせると500の軍を待ち受けた。

「全軍！！目の前の二人を捕らえろ！これは遠呂智の命令だ！時空を越えてきたものは捕らえろと！」

「我ら二人が先行する！皆、後に続け！！」

赤い鎧を身にまとった男と蒼い龍のような二人の若い男が、承太郎と八雲の方に兵を連れて駆けてきた。

「ほお…修羅の血が騒ぐか」

八雲が手を水月の高さに上げて、腰を低くし構える。

「真田幸村！」

「趙子龍！」

「「参る！！」」

二人の男が槍を手に向かってくる。真田の方は十文字槍を持ち、趙雲（字が子龍）は竜胆という名の長い槍を構えていた。

真田が先手をとった。素早い突きで八雲の喉を狙う。それにたいして八雲は素早く身体を捻りうまくかわし、前方に宙返りをしながら真田に対してかかと落としを繰り返す。

「ガキイン！」

真田は槍でかかと落としを受け、反撃に転じようとするが2発目のかかと落としに気づき片腕でそれを受ける。

「ぐう！二段攻撃かっ！？」

八雲が宙に舞い、圓名流”斧鉞”の2段目を決めた瞬間、視界の隅に赤い物が入り瞬時にそれを掌打で上に跳ね上げる。しかしそれは素早く引込み、瞬時に1、2、3連続と閃光のような速さで向かってくる、八雲は一つ目を真田の槍を踏み台にして後方宙返りでかわして、2発目を回転中に膝で弾いて防ぐが、3発目をかわしきれず肩にかする。

八雲は地面に付くと、趙雲に向かって後ろ回し蹴りを放つ、それを趙雲は槍でうまく弾くと既に目の前に回し蹴りが飛んできた。趙雲はそれを槍で突き抜こうとするが、急に変化して下から蹴り上げてきた。あまりの早技にそれを鎖骨に受けてよろける。

「へえ…やるねえ。その十文字槍…、確かにかわしたと思ったんだが槍の横に付いてる刃にかすってみたいだな。そして子龍さんの突き…。最後はギリギリまで見えなかった。あんたらやるな！陸奥圓名流に挑戦するにふさわしい」

真田が斧鉞の衝撃で一瞬怯み、趙雲がよろけた瞬間に間合いを空けて八雲はそう言った。

「貴公の拳法は凄まじいものを感じるな…。仕合いをしていて初め

「の恐怖だ」

真田はヒビの入った腕の鎧をみて言った。

「我が槍捌きをかわした上に、確実にとったと思った一撃をかする程度、敵ながら実に素晴らしい」

八雲は正直この勝負を五分五分だと感じた。相手の阿吽の呼吸でくる槍と二人の実力に正直驚いていた。

「あんたら強い。だからこつちも今からは本気で行く！！死ぬ覚悟で来いッ！」

八雲は勢いよく地面を蹴った。瞬時に真田との間合いを詰めようとするが、真田も黙って見てはいない。十文字槍を横に振り、間合いを自分の物にしようとする、八雲は軽くそれを飛び上がりかわすと趙雲の槍が背後から突いてきた。

連携を見極め瞬時に身体をぶらさせてかわし、脇と身体で挟み動きを止める。そのまま突かれた勢いに乗り、真田の槍の間合いを潰した。

「まずは幸村さん！あんたからだ！」

掌打を真田の顔面に叩きつける。真田は槍を戻そうとするが間に合わず、クリーンヒットしてそのまま軽く吹き飛び地面に落ちる。が、八雲はそれを追いかけるように顔面を狙う、真田も槍を戻して真上からくる八雲に槍を突き出す。

「甘いぜ！幸村さん」

さつきよりは深く頬を削るが、全然致命傷とまではいかない一撃。膝は止まることなく真田に襲いかかってきた。

「ズガアアン！！」

砂煙が上がり、趙雲は八雲への攻撃を止めて間合いをとった。

「次はあんたの番だ……。子龍さん」

趙雲は静かに矛先を八雲に向けた。そしてそのままじっと八雲のこを見ている。

「完全にオレに力を向けたか、連携を捨てたことで全神経を集中す

るか」

趙雲の行動に八雲も下手に攻撃に転じることが出来なくなってしまう。八雲は趙雲の狙いが一撃必殺だと直感した。次の一撃でどちらかが絶対に倒れる。八雲もその場で構えをとる。

動きを見せたのは趙雲だった。趙雲の持っていた槍が消えたのだ。

八雲の目にさえ映らなかった。

「うぐっ…」

八雲は現れた槍が自分の身体へと伸びているのを見た。趙雲の突きが決まった。しかし、趙雲は決めたと言う表情を見せない。そして趙雲の手には力が込められている。

「どういうことだ…。槍が…抜けん」

八雲はニヤリと笑うと静かに言った。

「陸奥圓名流“金剛”。この勝負終わりだな」

急に八雲の表情が変わった。金剛を解こうとした瞬間、槍が八雲の体の中を進んできたのだ。

「…あんた、その手…はずそうとして力込めてるわけじゃないようだな」

趙雲は力を込めている理由は、抜くためではなく貫くためだった。

「この趙子龍の槍に貫けぬものはない!!」

八雲は金剛を解くことができなくなった。趙雲の力が緩むか、八雲の金剛が貫かれるかするまでこの状況は動かないように見えたが、八雲は笑った。

「やつぱり、オレの勝ちだ!!」

急に八雲が後ろへ飛んだ。趙雲もそれに反応して槍を突いて追うが、八雲は槍を両手で掴むとそのまま上に飛んだ。そのまま前方に宙返りすると2発目の斧鉞を趙雲の両肩にたたき込んだ。

「ぐあああ!!」

衝撃で槍を落とす趙雲に八雲は追い打ちを掛ける。

着地をすると同時に肘に右の正拳を打ち込み、そのままひねり込む

ように胸部に肘を叩きつけた。

鎧をも砕く力に吹き飛ぶ趙雲。八雲は戦闘態勢をといた。

頬にある程度の出血と腹部に傷を負うがこの勝負を制したのは八雲だった。

第5話：課せられた試練

500の兵はその場に立ちつくしていた。

自分たちをまとめる将が目の前で一人の男に負けたからである。しかし、さすがは真田と趙雲の下に居る兵達だった。将2人がやられても誰一人逃げ出すことはなかった。

「ハア…ハア…。さすがにこの傷は効くな…」

八雲がその場にガクリと膝をつく、兵の中の一人がそれを合図に剣を抜いた。他の兵もそれに習って次々と武器を構え始める。

「この状況、やばいな…。どうする？ジヨジヨ」

いつの間にか側に立っている承太郎に八雲が苦笑いをしながら尋ねると、承太郎はそつと笑った。

「安心しな、オレのスタープラチナは能力者以外に見えない」

八雲は全然安心出来なかった。いくら見えないからと言って、承太郎一人でこの数を相手にするのはさすがに無理でしかない。八雲はそれでも承太郎がそれ以上何も言わずに黙って立っているのが分からなかった。

「お前も戦を好む修羅…か？」

承太郎はまたニヤリと笑うと静かに口を開く。

「さあな、見てろ、もう終わっている」

急に兵士達の方から「ガシャン、ズシャ、ドサッ」と音が聞こえ始めた。

「ひいひい！？武器がこ、壊れていく！？？」

動揺を隠せない兵士ら、一力所から動揺が始まりそれは波紋のように徐々に周りに広がっていった。

「ククク…ハッハッハッハ！お前は修羅じゃないな！ただの阿呆だ」
八雲は痛てつと言いながら、大声をあげて笑った。承太郎は八雲が真田と趙雲とやりあってたときに時を止めて、兵士達の武器だけを破壊していたのだ。

「策士と言つて欲しいがな」

承太郎は阿呆はお前だと言わんばかりの顔で八雲を見下ろしながらそう言った。

「何故、トドメを刺さなかった…」

倒れていた真田が上半身だけ身体を起こした。兵士からざわめきが起きるが、すぐに静かになる。

「あんたらは殺すには勿体なさ過ぎる。それに心の底から遠呂智に従っているわけでもなさそうだしな」

八雲の言葉に真田は言葉が詰まってしまった。

「図星のようだな…。そもそもお前達は俺らを捕まえるなら、兵達と一斉に来ればものの数十分で捕まえられただろう。それもしてこなかった、それは俺たち抵抗勢力の力を見ておきたかつたんじゃないのか？」

承太郎が八雲に続いて核心を突く。真田はそこまで言われてもそれを認めようとはしない。それどころか自分から遠呂智に服従したとまで言い始めた。

「もう良い…真田殿、真実を私の口から話します」

趙雲が胸を押さえながら歩いてきた。そして真田の側に立つと、止めようとする真田を目で制し話し始めた。

「我らは四年前にここに飛ばされてきました。たぶんその時こちらに来たのは…、魏・蜀・呉の殿の側にいた者達でしょう。私は蜀の将ですが、ここに飛ばされたときの兵達の動揺は今でも忘れない…。そして遠呂智はそこを突いてきたのです。軍がくずれていたところを一気に攻められ、半月もしない間に攻め落とされ、我が殿である劉備様は捕らえられました。最初は殿を救出するために何度も策を練り、何度も攻めましたが。しかし、僅かなところで逃げられてしまっていました。

そして、残った兵達の疲労が限界を迎え始めた時に、遠呂智の軍師をしている姐己という女が私たち將の前に現れてました。姐己は私

たちに殿の安全は保障する、だから遠呂智軍と共に世界の統一をすると言うことで降伏しろと言ってきました。最初は我ら将もそれを断っていたのですが、時間が経つ事に一人また一人と殿のために遠呂智軍に降伏していきました」

趙雲が話し終わった時には、八雲も承太郎も言う言葉を決めていた。「趙雲、幸村、お前ら俺たちと一緒に来ないか？」

承太郎が八雲にこれで良いのだろうか？という風に一瞬目を向け、その後2人の目を見た。

「…しかし、私が抵抗すれば殿の命が…」

「オレは趙雲殿の力になると決めた以上は趙雲殿の行く先に着いていく」

趙雲が返答を渋っていると、真田が背中を押すようにそう言った。

「子龍さん？オレは今の話を聞いていて、劉備さんはそんな簡単に殺されないと思うが？劉備さんは蜀の将を遠呂智側に居させるための…ん…いわば保険代わりだろ？オレの予想だと子龍さん以外にも蜀には猛者がいると思う。劉備さんをもし殺したとして、それが蜀の将に知れ渡ったら、内部で反乱がおきることになる。それを鎮圧出来るにしろそれ相応の被害が出る。だから簡単に殺されはしない。だから、子龍さんがその間に殿様を救うために出来ることを考えるべきじゃないのか？」

八雲は趙雲にそう言うのと承太郎に目配せして、そのまま本拠地に向かって歩き始めた。

「趙雲、幸村…待ってるぜ」

承太郎もそれだけを言うのと歩き始めた。

趙雲は悩んでいた。八雲の今の話を聞いて、劉備の安全に確信を持つことが出来たものの、自分の中ではまだ不安が残ってしまったている。

「これは自分に課せられた試練なのだな…」

趙雲は兵達の方を向いた。

「我らは今からあの2人の後を追う!!遠呂智に抵抗する勇気のあ
る者は着いて来るが良い!」

趙雲と真田は歩き出した。そして、その後ろには500人の兵が1
人も欠けることなく着いてきていた。

第6話：東方不敗マスターアジア

八雲達と離れたクリリンといえば。

「遠くで激しい戦闘があつたみたいだな。一つは八雲の気だった」
一人で岩場に腰をおろしていた。どこに行く当てもないが、八雲達の場所へ行けば大勢力の遠呂智と闘うことになる。つまうし、遠呂智につけば承太郎や八雲と闘うことになる。そんな迷いからまだ動けずにいた。

「なんだ…？すぐ近くはかなり大きな気と大きめの気！？いつの間にこんな近くに」

クリリンは素早く岩場の影に身を潜めて様子をうかがった。そして現れた人物にクリリンは啞然となった。

「ん…？ここにクリリンの気を感じたんだが気のせいだったか？」
そこに現れたのは、頬にある十字の傷が歴戦を物語り、甘いマスクを持つ最弱の戦士ヤムチャだった。

「ヤムチャさん！？どうしてこんなところ…ッ！？」

クリリンは岩場から飛び出してヤムチャに近づこうとした瞬間、真横からの物凄い殺気を感じ身を翻して回避した。

「ほお、貴様はなかなかやるようだな。ヤムチャの仲間だということから期待しないで来てみたが、どうやら多少骨があるようだ」

赤い鉢巻と赤いマントを身に着けて、頬の十字が過去の戦いを思い出させるこの男

「おいおい、それはないぜ？あんな不意打ちだったらドモンだってかわせないぜ」

名をドモンと言った。ヤムチャとドモンがどう知り合ったかはクリリンは興味なかったが、ここまで気配を殺して自分に近づけることは、相当の達人だと直感した。

「あんた…遠呂智側の人間か？」

クリリンは気を練りながらドモンに質問した。ドモンの方も構えを

とって力を集中し始めた。

「おい！ドモン！戦いに来たワケじゃないだろう？俺たちは遠呂智の人間じゃない！やめええ…ひいい」

ヤムチャは2人に睨まれて怯えてしまった。

「ほお、臆病者と聞いていたがそうではないらしいな」

ドモンの言葉になんの反応も示さないクリリン。ドモンはそれに力ツと来た。地面を強く蹴り一気に鳩尾を狙った拳を打つ。

「はああああ！！」

ゾクリッ…。ドモンは瞬間的に攻撃を中止して間合いをとった。異常なほどの殺気が背中を駆けめぐったのだ。その殺気はドモンの後ろから感じた。

「き、貴様は…東方不敗マスターアジア！！」

殺気の正体はドモンの過去の師であつた男だつた。

「この阿呆がつ！ここまで殺気を出さないと気づかないのかっ！！」

「気円斬ツツ！！」

ギャルルルッ！クリリンが何の躊躇もなく東方不敗に気円斬を投げた。

「ほお、おもしろい事が出来るではないか。しかしこんなもの！！」
カッと目を見開くと気円斬が東方不敗に当たる前に爆発した。ヤムチャは一体何が起きているのか整理が追いつかないでいるが、ドモンはクリリンの技と東方不敗の圧倒的な存在感に押されていた。

「あんた…。一体なんなんだ？あんたからは悪の気しか感じない…」
クリリンはドモンと対峙しているときから気づいていた。気配を殺していてもその圧倒的な悪がクリリンには感じとれたのだ。

「ふんっ！悪はどっちだ。遠呂智の統一を阻止しようとする虫けら共が！なぜ邪魔するのじゃ！」

クリリンは一瞬自分はどちらにもついていないと思つたが、遠呂智の間違ひは何となく感じているので、つい反論してしまった。

「遠呂智がしようとしているのは統一じゃない！圧倒的な力による

支配だ…。そんな世界で何が良いんだ？満足するのは遠呂智とその周りの奴らだけじゃないかつ！」

東方不敗はその言葉を聞いて自分の愛弟子であるドモンに目を向ける。

「ドモン！お前は どう思 っ ておるのじゃ？」

「俺は…。俺は遠呂智の考えなんか知 っ たことではない！だが、あんたが遠呂智の力を利用してやろうとしていることは間違 っ っている！…何が世界の初期化だ っ ！人間達を絶滅して残るのは、他の者達の憎しみと闘 っ た者達の傷跡だけだ！！」

「ドモンッ！…だから貴様は阿呆なのだッッ！！」

ゴウッ！と東方不敗の喝で衝撃波が走る。そして東方不敗から黒い闘気が滲み溢れてきた。

「ドモン…さん。ヤムチャさん！来るぞ っ ！！」

シャッ！ほぼ同時に3人が姿を消した。…シャッ！そして一足遅くヤムチャも動き出す。

「波アア！！」

クリリンのかめはめ波が東方不敗を追う。しかし東方不敗の手刀で軽く払いのけられる。

「もら っ たああ！肘打ち、正拳！とうおりゃああ！」

払い終えた瞬間にドモンが目の前に現れて、態勢を立て直す暇なく攻撃をしてくる。が…。

「ドモンッ！そいつは残像だ っ ！繰気弾ッ！！」

フウ…とドモンが触れた瞬間に形がくずれてそのまま消える。そしてドモンの後ろに東方不敗が現れると同時にヤムチャの繰気弾が襲いかかった。

「もら っ たああ！！」

「二重残像拳じゃ！ちえりゃあ！！」

繰気弾もドモンと同じような結果になり、今度はヤムチャの背後に現れた。そのままフツと拳だけが消えると、ヤムチャは地面に叩き

つけられる様に落ちていった。

「ヤムチャさんっ！くっ…オリジナルの技をみしてやるぜ…。

界王拳の応用した新技だ！豪龍拳だああ！！」

ガガガガガッ！！地面が大きく揺れ始める。そしてクリリンの回りから赤黒い闘気が吹き出し、クリリンの目も凶暴そうに真っ赤に光った。

「ウオオオオ！」

東方不敗が瞬きをする瞬間には目の前にクリリンの姿があった。クリリンの右フックをかわすが、同時に膝蹴りが飛んでくる。それを腕で凌ぐがそのまま態勢を直す前に逆の足での回し蹴りが飛んでくる。

「ぐううう！は、速い…そしてなんと重い…」

一回地面に降りて態勢を立て直す、クリリンの追撃が既に迫っていた。それをなんとか全て受けきるが、東方不敗に焦りが見え始めていた。

「ハゲッ！その技をやめろ！！ハアアア…ハッ！」

ドモンがクリリンを飛び越えて、東方不敗に挑みかかる。東方不敗も焦っていたが、さすがは場数を踏んだだけのことはある。すぐに精神を落ち着かせドモンの攻撃をはじいた。

「まだまだ貴様のような出来損ないの弟子に負けるわけではないわっ！！」

ドモンを両手で押し飛ばすと、東方不敗は一気に間合いをとった。

「流派、東方不敗が最終奥義…」

「ウオオオオ！」

「ハゲッ！逃げろお！あれをくらってはダメだ！！くっ…ちえりやあ！」

クリリンの胸ぐらを掴むと、技の射程範囲外まで投げ飛ばした。

「流派、東方不敗の名の下に…俺のこの手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ…唸れ！必殺…」

「石破天驚拳ッッ！！」

「ゴッドフィンガー!!」

両者が激突した。激しい力と力のぶつかり合い。だが、圧倒的に東方不敗が押していた。

「どうしたっ！ドモンよ!! 貴様はその程度かっ!!」

「うおおおおお!! ま、だ…だああ!!」

ドモンは自分の怒りを相手にぶつける…が、完全に押し負けている。

「ぐう… お、お…ま、負ける…」

グオオオ!! 石破天驚拳に飲み込まれるドモン。そしてそのまましばらく吹き飛ぶ。

「これでは生きておらぬ…か」

東方不敗はクリリン達にはもう目もくれずにどこかへ立ち去ってしまった。

第7話：3人の行動

「ぐう…クリリン…？ドモン…は何処だ？」

ヤムチャは瓦礫の下から這い出てくると、辺りを見回した。そうすると直ぐ近くにクリリンがその場に立ちつくしていた。

「大丈夫か…？クリリン！！」

腕を押さえながら痛みを我慢し、クリリンの側に近づいていく。クリリンはヤムチャを振り返ることもなく、その場に膝を落とした。

「ぐうう…。身体が壊れちまいそうだ…。反動が強すぎる」

ビキビキと筋肉が軋む音がヤムチャにも聞こえた。クリリンは振り返ることが出来なかったのだ。体中の筋肉が悲鳴を上げてしまっていて、その場から動くことも出来ずにいる。

「ちょっと待ってくれ！たしかここに二粒…。あつた！良し！！」

ヤムチャは懷から取り出したそれのはじっこをかじると、残りをクリリンの口に押し込んだ。

「ハア、ハア…これは仙豆！？ヤムチャさん持ってたんですかっ！

？」

クリリンとヤムチャが食べたのは仙豆というカリン様がつっている豆である。これを一粒食べれば、10日間は何も食べずにいられて受けた傷も全て治してくれる良薬である。

「ああ、この前カリン様のところに顔を出した時に、闘うことはないと思ったのだがとりあえず貰っておいた…。つと、ドモンを探さないとな」

「たしかこの辺りに小さくなった気が…あれ…か？」

クリリンとヤムチャの目のさきには、岩の中からでている一本の手があった。小さい気はあそこからでている。とりあえず2人はその方向へと向かってみた。

「ドモン大丈夫か！？今助けてやるからな」

ヤムチャは岩に手をつけると、そのまま氣を送り込み岩を砕いた。

「さすが…氣の使い方は上手ですね？」

クリリンもヤムチャの技術は尊敬している。しかし、当のヤムチャはその技術に自分の実力がついていけないことをだいぶ氣にしていた。

岩から出てきた手を引つ張り、ドモンを地面に寝かせる。ドモンと何度も2人は呼びかけるが、ドモンに意識はなかった。ド蒙ンの身体は岩に突っ込んだ時に受けたらしきすり傷や打撲しかないことに2人は氣づいた。

「おかしい…。あれだけのバカでかいエネルギー波をくらって、外傷がほばないなんて…」

クリリンはド蒙ンの身体を見えるが、これといってその他に目立つ傷はなかった。

「ところで…この手のマークは何だ？」

ヤムチャがド蒙ンの手をクリリンに見せる。ハートの中に交じり合った剣が記されている。2人はそこからよく分からない複雑な氣を感じた。

「なんだろう…。とりあえず仙豆を無理矢理飲み込ませましょう」
ヤムチャはそつかと目的を思ひ出すと、仙豆をド蒙ンの口の中に突っ込んだ。

「うっ…ここは？」

ぼんやりと霞む視界に2人の男が写っていた。見覚えはある…。一人はここに自分が飛ばされた時、呑氣に昼寝をしていた。もう一人は先ほど出会い、物凄い禍々しい技を使った男だ。

「おっ？氣がついたか？ドモン」

自分と同じ十字の傷を持った男が、待つてましたと言わんばかりの顔でこちらを振り向いた。それに続いてもう一人の男もこちらを向いた。

「身体の方は大丈夫か？」

後から向いたヤツが心配そうに聞いてきた。そういえば俺の身体から痛みや傷が消えていた。

「お前ら俺に何をしたんだ？傷や痛みが消えている」

2人は仙豆のことを俺に事細かに話した。

「ドモン、お前はこれからどうするんだ？」

ヤムチャがドモンにこれからのことを聞いた。ドモンはしばらく考えると珍しく冷静に答えた。「俺は東方不敗を倒す…。だが、このままではまた同じ結果だ。それに遠呂智とか言うヤツに東方不敗はついている。簡単には捕まらないだろう。その間当てもなく探しているのは時間の無駄だ。少しでも力と情報が欲しいところなんだが…」

ヤムチャとクリリンは目を合わせてニコツと笑い合つと、2人同時にドモンの方をみた。

「どうだ？俺らと一緒に来ないか？少なくとも一人よりは情報もあるし、俺たちの技や力を教えることも出来る」

クリリンは一瞬苦い表情をしたが、その言葉に頷いた。

「ほう…悪い話ではない…な。良いだろう！その話し乗った！しかし、一人の方が良いと思ったら別行動をとらせて貰うからな」

ドモンはヤムチャとクリリンを見るとスツと立ち上がった。

「それで…行く当てはあるのか？」

ヤムチャが急に目をそらした。ヤムチャには行く当てなど何処にもないのだ。まして情報などなにもない。

「ふざけるなっ！行く当てもなかったら話しにならないだろう！」

ドモンがヤムチャを怒鳴りつける。そこでクリリンが言いにくそうに口を開いた。

「行く当ては…ないわけじゃないぜ？今からそこに行こうと思ってるんだが…」

ドモンとヤムチャはそれについていくことにした。クリリンが行こうとしている当ては、もちろん一つしかないのだが…。

第8話：激突

また戻って、承太郎と八雲達。

「ここがお前の言っていた拠点か？随分とでかい城だな…」

承太郎が八雲の後に続いて門をくぐると、その立派さに少々驚いた。趙雲と真田も兵を引き連れて来るときに、その城をみて少し立ち止まるほどだった。

「ああ、ここは俺らが遠呂智に気づかれないように落としたんだ。

こんな城は遠呂智にとっては小さい小屋みたいなもんさ」

八雲は真田と趙雲に兵達を休ませる場所を説明すると、2人は兵達に場所を指示して戻ってくる。八雲は2人を待つとまた歩き出した。

「八雲殿…。このことを我々は知っていました。たぶん遠呂智が付けた監視役がこのことを誰かに伝えている可能性が」

急に八雲の顔に不安がよぎった。八雲も真田も趙雲もまだ傷が完治しているわけではない。八雲に関しては2人から受けた傷がまだふさがりきっていないのだ。

「斥候班！至急城外の回りを見てこい！！」

趙雲が自分の兵に言うと、何人かが素早く動き始めた。

「それじゃ、俺たちは戦の仕度をするか…」

八雲が動こうとすると、なにかに掴まれて動きを止められた。

「お前はそこにいな。ここは俺が引き受けたぜ！ゆっくり休んどくんだな」

承太郎は2、3歩離れたところからスタープラチナを出して、八雲を止めたのだった。承太郎は八雲の変わりに動き始めると、そのまま三千の兵達に戦の準備を整えるように指令を出した。

「報告です！南西、十キロの位置に五千の軍が一つ！北から三百の軍が一つこちらに向かっております！！」

斥候班がもどり、城外の情報を聞くと休んでいた八雲は再び動き出した。

「3、40分つて所だろうな…。わかった！子龍さんと幸村さんとジヨジヨに同じコトを伝えてきてくれ」

「既に他の者が報告にあがりました！」

「良く働くな…。よし、お前らは休憩している。…時間があまりないか」

八雲は胴着に身体を包むと、戸を開けて外に降りた。そこからしばらく歩くと、すでにそこに三千の兵達が戦の準備を整えて、待機していた。

「ほお…。たいしたものだなジヨジヨ」

兵達の一番前の少し高い台に、帽子を深めにかぶり下を向いているジヨジヨが八雲の声に顔を上げる。

「素直な奴らだったぜ？」

ニヤリと承太郎は笑うと、服の一部分が破れているのを八雲に見せる。八雲は知っていた。この兵達の中には、血の気の多いものが多い、簡単にはまとめられないということ。

「後は、趙雲と幸村だけだぜ？策は俺の言うとおりに動いてくれ」
承太郎は八雲に事細かにこれからの攻撃のことを説明した。そこに遅れて趙雲と真田が姿を現せ、また同じコトを2人に説明した。

「わかった。それじゃあ…。俺からは700で良いな？幸村さんは500の方についてくれないか？」

八雲が兵達に何かを伝えると、そこから700ばかりの兵が真田達の500の兵に混じった。

「それで…。我らが正門から出て正面からぶつかり、横腹を突くように時間差で真田殿が襲撃する」

四人はそれに頷き合うと、真田は1200の兵をつれて裏門に姿を消した。

外から物凄い数の雄叫びが聞こえてきた。

「そろそろ…か、よし！全員気合いを入れていけ！！」

八雲が一喝すると回りの熱が一気に上がった。兵達が門を開く。

「全軍！！突撃ッッ！！」

趙雲が戦闘になり、馬を駆って敵陣へと突っ込む。

ヒュッとして趙雲の槍が一度しなれば、2人の兵が倒れていく。趙雲はどんどん馬を進めていく…が、急に鋭い殺気を感じて、馬を止めてしまった。

「カス共がッ！調子に乗るなッ！」

赤い馬を駆り、巨大な戟を振りかざす男が八雲の兵を一人また一人と蹴散らしていった。男の名は呂布。字は奉先という。

「呂、呂布だああ！ぐえッ」

呂布の登場で八雲達の兵は一瞬にして士気が下がった。趙雲はその場の敵を倒しながら、呂布めがけてその槍の矛先を変えた。

「呂奉先とお見受けする！この趙子龍が一騎打ちを所望する！！」

呂布が趙雲を睨む。そしてニッと笑むと趙雲と呂布の回りの兵が後ずさり、空間ができた。

「ハッハッハ！少しは出来るようだが、俺に一騎打ちを仕掛けるなど命を捨てたも同然！！」

赤い馬…赤兎馬が地面を強く蹴る。趙雲が攻撃をするよりも早く、

呂布は戟を振りかざす。

ガキイイン！！

ピシリ…と竜胆に小さいヒビが入るほどの一撃。趙雲は馬から落ちそうになった。あまりの力の違いに趙雲も恐怖で震えかけたほどだ。

「くっ…。だが！まだ！！でやああ！」

趙雲の光速の突きが呂布めがけて炸裂する…が。呂布は簡単に腕で払いのけると、戟の柄の部分で趙雲を薙ぎ払った。

「がっ…うっ…あく…」

柄の部分で殴られた鎧の一部が粉々に砕けている。趙雲は馬から落ちるとそのまま地面に叩きつけられて、あまりの痛みにしばらく立つことが出来なかった。呂布がそれを見逃すワケがなかった。呂布

も赤兎馬から降りると、戟を趙雲の首めがけて振り下ろす。

「無念ッ！……………ん？」

趙雲が自分の死を覚悟し、目を閉じるが痛みは腹の辺りからしかなかった。死ぬには及ばぬ程の痛みに目を開けてみる。そこには屍餅を着く呂布と、それを見下ろす承太郎と八雲の姿があった。

「貴様らあ……。殺すッッ！！！」

第9話：代償

「貴様らあ…殺す！」

呂布は自分が尻餅をつかされたことに完全に切れた。ゆっくりと立ち上がると、3人を睨み付ける。

「噂には聞いていた。赤い馬を駆り、一騎で大群を崩すもののふが遠呂智のところにいるってな」

八雲は呂布の気迫に修羅の血が騒ぐのを抑えながら、承太郎と趙雲にそれを教える。

「歴史の教科書でしか見たことなかったがな…。絵とは全然違うぜ」
承太郎は予想よりも大きく、凶悪な呂布に背筋が凍り付いた。承太郎の身長は190はあるのだが、目の前に立つ呂布は承太郎が見上げないといけないほどだった。

「修羅にも恐怖を与える…。遠呂智の力か？」

八雲は修羅の血が騒いでいるのではなく、怯えていると分かると遠呂智の底知れぬ力に恐怖した。

「ふん…関係ないな！貴様らは邪魔だっ！消えろ！！！」
グウオオン！！

承太郎と趙雲は素早く方天戟の範囲からバックステップで離れる。

八雲は前に間合いを殺した。

「ほお…だが甘い！！」

八雲が腕で柄の部分を受ける…が、

「…ッグ！ガアア！！」

そのまま身体もろともはじき返されてしまった。八雲はすでに態勢を立て直してはいたが、腕を片方折られるダメージを負った。

「弱い！雑魚共が！！遠呂智に仇なす者共はこの程度かああ！」

呂布が雄叫びを上げた。両軍の兵士がその声に動きを止める。中にはあまりの迫力に気を失う者まで出てきた。

「ふん…。この程度でびびるか…」

呂布は心底呆れた様子で八雲達を見た。

「うおおおおおおお！！！！」

その瞬間、承太郎が大声で叫びだした。それと同時に怯えていた兵達もなんとか動きを取り戻し始める。八雲と趙雲が呂布に挑み掛かる。

「呂、呂布様あゝ！敵軍！およそ二千あまりの兵が…我らの横から！！」

兵の一人がそちらを指さす。そこからはたったの七百でしかないのだが、奇襲という混乱から二千の大群に見える騎馬と歩兵が迫ってきた。

「真田幸村！参る！！」

先陣を切って来たのは幸村だった。幸村はそのままの勢いで十文字槍を呂布にぶつけた。

「甘い！雑魚がああ！」

呂布が瞬時に払い落とす、そして真田を叩きつぶそうとしたとき、真田の背後である死角から趙雲が刀を振り下ろす。

「棒きれで俺を殺せると思うな！！」

それを片腕で受け止める。そして2人を囷として、刀を受け止めるため上がった腕の脇腹を八雲が足刀、肘打ち、正拳のコンビネーションを打ち込んだ。

「がつ！ぐううう！小賢しい…」

さすがに急所を3発も打たれてはいくら呂布でもダメージをくらう。しかし、それでも呂布は腕の下にいる八雲を肘打ちで潰そうと肘を落とそうとした。

「ザ・ワールド！オラオラオラオラオラオラオラオラアアア！！！！」

時が止まった。承太郎はその間に打てるだけの拳を呂布の脇腹にたたき込んだ。

「そして時は動き出す」

ズガアアア…。

衝撃が一度に呂布を襲い、呂布はそのまま横に飛んだ。

「ぐうう…うおお…。ガッ…ハッ…」

呂布は予想以上の痛手を受けて、怯んでいた。八雲はそれを見逃さず一気に間合いを詰めた。

「悪いがあんたには消えてもら…うぐっ…」

八雲は途中で腹を押さえて膝を突いた。戦いの中のダメージが丁度今限界点を迎えてしまったのだ。

「貴様らには付きあつてられん…!!」

呂布はそういふとなにかブツブツと唱えて兵達と一緒にその場から消えた。

「勝った…のか？」

承太郎が辺りを見渡す。そこには自分たちの仲間が無惨な姿で倒れている。半分が死んだと考えると良いだろう。呂布を退けることは出来たが、その代償は極めて大きい戦力との交換だった。

第10話：それぞれの事態

城の回りには先ほどの戦いで死んでいった者達の墓が作られていた。そこには半分の兵達が埋まっている。死んでいった者の中には、先日子供が生まれた者、年端のいかぬ少年、家庭を持つ者も数多くいた。

「俺の…ミスだな…」

八雲は衛生班に傷の手当を受けながら、この状況を自分の責任だと思った。しっかりと警戒をしていれば、戦を避けることは無理だとしても、被害を抑えることが出来たのだ。

「だいぶ兵力は薄くなった。だが、俺たちのやるべき事は遠呂智を倒すことだ。それに、死んでいった者達の為にも、他の兵達を生かせば良いんだろ」

承太郎が八雲の様子を見に来た。八雲の横に腰を下ろすと、承太郎はそういつて後はほとんど喋らなかった。そして、承太郎の横で八雲は一人うつむき肩を震わせていた。

「クリリン…。まだか？」

ドモンが少タイライラした様子でクリリンに話しかける。クリリンの代わりにヤムチャがドモンに静かに言った。

「少し離れた場所で、めちやくちゃでかい気のぶつかり合いがあったんだ…。その気を探ってるんだってよ」

「ヤムチャさん、ドモン…大丈夫みたいです。行こう」

3人はその場所へとまた進み出した。

「こちら野槌のづちです。魏軍残党をほぼ壊滅はいついたしました」

遠呂智の軍に三国の中の大国である魏軍が壊滅状態にまでされていた。残るは、すでに包囲された小さい城のみとなった。

「すべてのものよ！聞け！！我らが魏軍もとうとう遠呂智にここま
でやられた！！だが、我が霸道の前に立ち塞がる者どもは、すべて
つぶしていく！！我らは力の限り闘う！奴らを倒し、遠呂智への見
せしめにしろおお！」

魏軍の大將曹操が全軍に喝を入れた。その中からは追いつめられて
いると一片も感じられない雄叫びが聞こえた。

「典偉！わしとこい…。これが最後の戦…かの」

曹操の後ろから大男が姿をあらわした。曹操は典偉にそう告げる。
しかし典偉はニヤツと笑って曹操に言った。

「丞相がいるかぎり戦に終わりなんてありやしませんぜ！！さあ、
いきましよう！！」

曹操の馬を引くと、典偉は兵達に門を開けさせた。

「全軍突撃ッ！！！！」

「ほお…。あれが曹操の器…か」

一人の男が木の上から戦を眺めていた。深く真つ暗な目には悲しさ
が入り交じっている。

「信長よ…。ヤツはお前に似ている。だがお前とヤツは違う。お前
のようなヤツは2人もいらないだろう？曹操には死んでもらう」

男が木の上から姿を消した。

「怯むなああ！いけッ！いけッ！…ぐつ、これが魏軍の死に損ない
の力とでも言うのか…」

野槌は魏軍の十倍の兵を遠呂智に与えられた。しかし、現実には魏軍
に押されているのだ。これが曹操という男との生まれ持ったの器の
違いなのだ。

「惇兄！ここは俺に任せてくれ！！兄貴はこの大將のところへ！！」

夏候淵が大刀を振り回して、夏候惇に叫ぶ。

「すまぬ！すぐに仕留める」

夏候惇は分かっていた。今、自分たちがいる場所は非常にまずい状
態だということを。このままの状態で行けば、どんなに頑張ろうと

敵の攻撃を四方八方から受ける。その前にどちらかが将を討てば、相手が崩れるのだが、たぶん間に合う事はない。

「ほお…、すごいな…。これらもARMの一種か？」

煙草を吸って、手には指輪をいくつもつけている男が野槌の前に現れた。

「貴様…何者だ…！」

男はニツと笑うと、こういった。

「お前みたいなデブの仲間ってことはないぜっ？」

「ぬっ…この状況が分からないのかっ！貴様の回りは全て貴様の敵だぞ…！」

男は煙草を地面に捨てると、それを踏みもう一度笑った。

「だから…どうしたっ！」

「身の程を知れ！そして死ぬがよい…！」

野槌の兵達が一斉に襲いかかった。

「デイメンションARM…。エアハンマー！」

男はまだ手の届かない間合いで拳を敵に向かってふるった。

「何を…血迷ったか」

しかし、すぐに野槌は異変に気が付いた。その拳の先にいた兵達みんな吹き飛び倒れていた。兵達の動きが一度止まる。

「貴様ツ！何をした…ッ！？貴様は…。アランか？」

男は野槌の言葉を聞くと、手を野槌に向けた。

「ああ、その通りだ。ガーディアンARM…。ア・バオア・クー」

野槌の回りに球体が出来て、そのまま空中に浮き始めた。

「貴様ツ！何をする！お前ら！早くこの球体を壊せ！早くしろおお！」

野槌の怒声に兵達が困惑する。そして混乱状態の兵達にもアランは攻撃をした。

「ガーディアンARM…メヒリスト」

2体同時のガーディアンは精神力をかなり消費するのだが、アラン

はそれを余裕の表情で使いこなす。地面から出てきた巨大な口を持った植物が、兵士達をかみ殺していく。

「おい…デブ。なにか言い残すことあるか？」

アランはすでに背中を向けて歩き出していた。そして煙草に火を付けてから、一度ちらりと野槌を見る。

「ヒツ…た、助けてくれ…頼む…！」

「俺も急いでるんでな、それが最後の言葉か…。んじゃあな！バースト…アップ」

その言葉と同時に球体の中で大爆発が起きた。どんどん爆発に巻き込まれて粉々になっていく野槌。アランはそれを振り返ることなく歩いていった。

第11話：逃げる将と守る兵

「貴様…。何者だ！その身体にまとわす邪鬼…。ただ者ではないな」曹操と典偉は一人の男に足止めをくらっていた。男は目の奥に鬼のような凶暴さを持ち、それでも尚、冷静な雰囲気をただよわせる…。そう、修羅のような言葉が似合う男だった。

「まだ…八雲には会っていないのか…。都合がいいな。お前らには死んで貰う」

男がスツと構えを取った。同時に典偉が曹操の前に立ち、斧を右手に持ち左に大きめの戟を構えた。

「丞相には指一本ふれさねえっ！丞相！！お逃げください！ここはあつしが！」

曹操は典偉の言葉に従うがごとく馬を走らせた。しかし、男の狙いは曹操だった。男は身を翻すと、驚くべき速さで曹操を追撃しかかる。

「残念だが、その程度の馬では逃げれん！！」

『クンツ！』

男は足を捻り、そのままの勢いで跳びながら上段の回し蹴りを曹操めがけて繰り出した。

「させるかああ！」

典偉が戟をおもいきり投げつける。曹操に蹴りが決まると戟が男に命中するのはほぼ同時、男は曹操への蹴りを止めて、戟をはじき払った。

「丞相！そのまま東へ！ずっと東へ逃げて下さい！すぐに追いかけます！！」

「すまぬ！悪来…」

「邪魔をするな…」

男は典偉に向くとまた構え始めた。典偉はビリビリと男から圧倒的

な威圧感を感じた。斧を握る手に力がこもる。

「不破虎彦…参る！！」

「この悪来典偉が相手だああ！」

不破の名が悪来とぶつかった。

「ジョジョ、八雲殿！客人が来たのだが…。確かクリン？とか」

2人は顔を見合わせて数秒考えると、一人の男が頭に浮かんだ。

「そうか、ここまで来させてくれ」

承太郎がそういうと、その男はすぐに姿を現した。

「久しぶりだな。クリリン」

八雲が包帯を取り替えながらクリリンを見る。クリリンも少し恥ずかしそうにニコツと笑った。

「なんだ？敵側の使者だったら容赦しないぜ？」

承太郎が冗談っぽくクリリンに言った。

「よ、よしてくれよ！俺だってお前らと離れたときに、遠呂智の奴らの攻撃を受けてたんだからよぉ！」

その言葉を聞いて、承太郎と八雲は顔を見合わせた。クリリンは不思議がって2人に尋ねる。その間に廊下から2人の男が姿を現した。

「そいつらは誰だ？」

「ども、クリリンの旧友でヤムチャって言います。こいつはドモン。愛想は悪いがデタラメに強い」

「余計なことを言うな…。ちなみに遠呂智の奴らに攻撃を受けたと言ったが、その中の一人は俺の師匠だった男だ」

承太郎の気が上昇した。スタープラチナを出して警戒態勢をとったのだ。

「承太郎さん！安心して下さい！こいつは味方です」

承太郎はクリリンを一度見て、ドモンを見るとスタープラチナを消した。

「あのお…。ひとついいすかね？」

ヤムチャが八雲に尋ねた。

「なんだい？」

「ここで…戦いありました？」

「なんでそう思うんだ？」

ヤムチャが難しい顔をして言った。

「俺もクリリンみたいに気を感じれるんですが、ここら辺でいくつ
か戦闘があつたみたいなんです。それでここは人が少ないし、なん
だか血の臭いが強いんですよ」

八雲はそれを言われて、そこからクリリン達が来るまでにここであ
つたことを3人に話した。

「そう…だつたんですか…」

クリリンは悲しそうに呟いた。だが、承太郎はクリリンにもその死
をムダにしないことを告げて、そして次のことを考えようと伝えた。
そして、承太郎と八雲が次の行動を話し始めた。

第12話：悪来と不破

「魏軍と手を組む。その為にはここからだいぶん離れることになる。魏軍が籠城しているところは、兵達を連れて…一週間かかる。そこから魏軍への接触を図らねばならない。そして、そこまで行くのに戦が起きないとも限らない」

承太郎はこの作戦がうまくいくとはあまり思っていなかった。しかし、このままここで立ち往生していれば、確実に遠呂智に数で潰されてしまうと確信していたのだ。それならば、ここから少しでも離れて、抵抗勢力がある場所に行けばなんとかなるとまで思っていた。「遠呂智も馬鹿ではない。既に魏を制圧して、挟撃にあえば詰み…だぞ？」

八雲は承太郎の作戦に不安をあらわにした。しかし、そう言う八雲もこの作戦しかないと思っている。

「とりあえず、ここから離れることが先決だと思うが、それに行く場所がそこしかないとするなら…」

真田も既にこの作戦にかけていた。しかし、全員この戦力の消耗に焦りを隠せない。

「この作戦で一つ…遠呂智軍に対して有利なことがあります！」

クリリンが思いついた様に顔を上げた。

「俺とヤムチャさん…飛べます！空から見れば敵と遭遇しないルートを確認できる！それなら多少の遠回りになっても、全然安全にいけると思います！」

全員の意見が一致した。真田と趙雲は兵達にこのことを伝えるために部屋を出た。他の者も身支度を始めた。

「ガッ…ハッ…ハッ…こいつやりやがるぜえ…」

典偉の状態は一般の人間なら既に致死量を迎える状態だった。腕を折られ、鎖骨も碎かれ、肋骨は半分が碎けている。足も既にぼぼい

うことを聞かない状態だ。

「ほお…圓名流を受けてまだ立つか！だが、次で終わりにさせて貰う」

虎彦はトン、トンとゆっくりとしたステップで典偉との間合いを詰める。典偉は警戒をして斧を片手に構えるだけでいた。

「自分を守ろうとしている者の行動はわかりやすい…」

典偉が狙うのはカウンターだった。しかし、虎彦は足払いを典偉にかけるとそのまま自分の背中を地面に付けて、巴投げをかけようとした。

「ぐっ！まだだあ！！」

典偉が上に上げられた形で暴れた。その動きに虎彦の腕に掛かるバランスが崩れた。典偉はそれを見逃さず上から斧を虎彦に振り下ろす。

「ぐぼはああ！！」

ピクンと典偉の身体が揺れてそのまま虎彦に横に投げ捨てられた。典偉はそのままピクリとも動かず地面に横たわっていた。

「最後の見切りは良かった…が、不破圓名流の前には通じない」

虎彦はまた曹操を追うために動こうとしたが、

「ぐっ…」

ズキンと身体に痛みが走った。典偉の攻撃をうまく受け流していたのだが、あまりの力に流されずに虎彦に残ったダメージがあったのだ。

そして、そこにもう一人の男が現れた。

「よお。あんた強そうだね？どうだい？死合いしないか？」

年齢的には高校生くらいなのだが、体格はまるでそんなものとは言えない体格だった。

引き締まって、無駄な脂肪など少しも付いていない。見ただけで強いと分かる身体だった。

「…そうしたいのだが…な、生憎急いでいるんツツ！？」

「それがどうしたよっ！」

ブンツ！いつの間にか目の前に迫っている青年。そして素早い裏拳が飛んで来た。

「くっ！」

紙一重でかわすが、身体のダメージが動きを一瞬鈍くさせた。青年はその隙について鉄槌、逆腕のえんび、そしてえんびと同時に腰まで絞った拳がボディーを貫いた。

「ぐはあっ……！！ぐうっ……」

裏拳からの綺麗な連携がうまく決まった。青年はフツと笑うと殺気を消した。

「あんた……怪我しているのか？内側を負っているみたいだな」

虎彦は驚いた。攻撃として触れただけに、自分の内部に受けたダメージを悟ったのだ。

「ほお……見逃すということか……。……不破虎彦」

「範馬刃牙だ！こつちに来た親父に勝ちに来た」

「面白い……憶えておく……。だが、次に俺との死合いで殺気を消した瞬間……死ぬぞ」

虎彦はそういつて姿を消した。刃牙は特に当てなどなかったので、典偉の様子を見てそのままその場で昼寝を始めた。

第13話：煙草野郎と学生と悪者

「……う」

典偉は体中に走る痛みと共に目を覚ました。自分が生きている驚きと、すぐとなり知らない青年が眠っている驚きに完全に意識が覚醒した。

「ん？気が付いた？あんだいぶからだやられてるね…」

刃牙は腰を上げると軽くのびをして、典偉から少し離れた。そして両手を腰に当てるとニヤツつと笑った。

「その身体で俺とやるのかい？」

典偉から放たれた鋭い殺気を感じて刃牙から間合いを開いたのだ。

「てめえが誰だかもわからねえで、隣を許すはずねえだろっ！」

しばらく2人のにらみ合いが続いた。が、典偉は殺気を和らげると刃牙に問いかけた。

「あんたあ…ここに不破とかいう奴いただろ？そいつはどうなったんだ？」

刃牙は軽く上を見て考える素振りを見せる。確かにここで刃牙が退けさせたと言っても良かったのだが、刃牙はここであえて自分が来た時にはいなかったと伝えた。

「そうか…、もう一つ聞く。そのもう一人の男は一体誰だ？」

瓦礫の裏から一人の男が出てきた。先ほどアランと言われていた男だった。

「このおっちゃんは、敵側の指揮官を倒してあんたの軍を勝たせてくれた人だよ」

典偉はアランと言われる男から感じられる戦の素質を肌で感じた。特別力が強いわけでもなく、諸葛亮のようにずば抜けた知力をもったわけでもない…。しかし、なにか特別な力があるのだと感じていた。

「ハゲ、動くなよ？ホーリーARM：癒しの天使」

典偉は身体がフツと軽くなるのを感じた。先ほどまでの痛みは身体にない。それも全くと云って良いほどだ。先ほど感じた特別な力を理解した。

「安心するなよ？ここから一人一殺だ！！」

アランがそう言った瞬間、3人の前に3人の男が現れた。

「ナナシ！？」

「花山さんッ！！？」

「関羽殿ッ……！！」

3人とも驚きが隠せない。いきなり禍々しい殺気を現れた仲間から受けたのだ。典偉も関羽とは敵国同士であるが、今の状況で奇襲を受けるなど考えることなどしていなかった。

「久しぶりやな、アランのおっちゃん。ワイは恨みとかないんやけどなあ…、あの人が言うから仕方ないのや。死んでもらうで…」

「刃牙…悪いな」

「すまぬ、兄じゃの…くっ！！関雲長推して参る！！」

3人が3人と向き合う…が、アラン、刃牙、典偉はもとまたいしてフェアな人間ではない。

「殺すつてなら、殺すぜ？エアハンマーッ！！」

ズドンッ！とナナシのボディに一発が決まる。そのまま吹き飛ばされたナナシを追いかけて、アランがその場から離れた。

バキイイ！！

花山が一步よろける。刃牙がニッコリと笑って花山に言った。

「これは試合じゃないんだぜ？ゴングは顔を見た瞬間なってる…！！来いやああ！花山ああああ！！」

「どつりやああ！」

関羽が構える暇もなく斧を叩きつける。関羽はそれを紙一重でさばく。

「くっ…悪来の名に恥じぬといったところか…」
典偉と関羽が対峙した。

それぞれの因縁とも言われるような戦いは、3人の不意打ちから幕を開けた。

第14話：刃牙VS花山薫

「刃牙、今のお前は俺たちにとっては邪魔なんだ…」

花山がそう言いながら、状態を激しく捻る。刃牙はゾクリと背筋に悪寒が走った。

「ッシャッアアア！」

刃牙は花山に中段回し蹴りを脇腹に当て、勢いと膝の緩急を利用して逆の足を振り上げて肩から鎖骨に落とす、そしてそのまま肩に膝をかけ、回し蹴りをした足を持ち上げ顎に膝をヒットさせた。

「ガッ！！」

刃牙の顔が花山の手に掴まれた。今の刃牙の連続技にグラリとも揺らぐことのない身体、そのまま刃牙を引き離し手だけで刃牙を支える。刃牙はやられまいと花山の手を剥こうとするが、両手で抵抗してもビクともしない。桁外れの握力で顎が軋み始めた。

「~~~~~ッ！！」

蹴りの中でも最高の威力を持つ足刀を花山の肘に集中砲火する。が、花山の手で阻まれた口と鼻からは充分な酸素を吸うことも出来ない。それに加えて蹴りを出したところで地面を蹴ることが出来ないのだ。そんな蹴りを何万発打とうと花山が動じるハズがなかった。

花山はそのまま一度刃牙ごと身体を捻る、グググググ…と体が一周することと思うほど捻った。

「（防御ッ！！…違ッ！一撃ッ…）」

究極のテレフォンパンチ…。インパクトの瞬間に刃牙から手を離しておもいつきり刃牙の顔を殴った。どこまで飛ぶのかと言うほどの時間、刃牙は宙に浮いたまま顔から血を飛び散らし飛んだ。

ザンッ！刃牙が地面に落下する。

「まだやるかい？」

そこには既に花山が立って見下ろしていた。薄れている意識の中で刃牙はニヤッと笑った。ズシャッン！その瞬間、花山の拳がまた刃

牙の顔に降りかかった。しかし花山は眉をひそめて自分の手を見た。小指が折れていたのだ。当然そのような拳では刃牙相手には決定打に欠けてしまう。もう一度刃牙の方を見た。

『バキッ！ズンッ！バキィ！バキッ！』

花山の体が宙に浮いた。刃牙が花山に喉、水月、金的、膝の足刀コンビネーションである掣肘線連撃を決めた。しかし、刃牙もそれだけで攻撃をやめるはずがなかった。浮いた花山の顎を左背足上段回し蹴りで鮮やかに蹴り抜いた。そして落ちてくる体を左足が地に着いた瞬間に地面を蹴り、勢いを乗せて顎の連続のアップーを打ち抜いた。

「へっ…へへ…。あの時と同じ手だ。あんたの拳に勝てなくても指には勝てる…」

「まだ…やるかい？」

一度膝をついた花山だがゆっくりとまた立ち上がった。もちろん刃牙の渾身の一撃を連続で受けたので、深刻なダメージを受けているが刃牙もそれは同じ事だった。

「くっ…簡単には逝かねえかよっ！」

ダッ！と勢いをつけて膝に蹴りをしかける…しかし、パンツ！当たる直前に刃牙の顔が歪みまた吹っ飛んだ。刃牙の視界がかなり揺れている。膝がガクガクと震えていて、まともに立って構えることが出来ない。

「ま…だやる…かい？」

ゆっくりと近づいてくる花山と脳震盪に体が動かない刃牙。かすかに働く頭でほぼパニック状態で考えた。

「（なんなんだ…。蹴る直前まで拳なんてなかった…。この威力であの速さ！なんだ！？俺にもわからない攻撃？ならばもう一回仕掛けるッ！！）」

揺れる体に喝を入れて、もう一度刃牙の方から間合いを詰める。

「花山アアアア！！！」

パパパパパンツツ！！

グシャッ！という音と共に地面に叩きつけられた刃牙…。ヒクリヒクリと動いていたが、そのうち動きが小さくなり、その後は全く動けなくなった。

「甘く、小さく、そして弱くなったな刃牙…。あばよ」

「待てよ、花山。人の技を使っておいて何にもなしか？」

花山よりは体が小さいが、この男も良い体をしていた。花山もそいつを見て嬉しそうに笑った。男は花山を前に足を開き、腰を低く構え、拳を花山に、手を腹に添えて空手の構えだった。

「愚地克己…。あんたも来てたか…。」

花山が靴を脱ぎ、スーツの足の裾を掴みそのまま上に持ち上げてブリブリと音をさせながら全て破り脱いだ。

「フンツ…。本気ってか？親父と言い、あんたと言い！！なにしてんだっ！！」

花山と愚地克己の第二ラウンドが幕を開けた。

第15話：勝つモノ負けるモノ

「痛ッ！派手にやってくれるわ…。まあ、ハンデってのでありやな」
ナナシは落下する時にバランスをとり上手く着地をした。そしてポケットからいくつかのARMを出すと、それを指にはめながらアランと対峙する。

「（今の一撃は完全に入ったはずだ…。普通なら悶絶するか死ぬくらいおかしくねえ…）」

アランは集中して魔力を高めていた。しかし、ナナシから感じられる魔力の底知れぬ力が気が散ってしまい、満足に魔力が溜められない。

「おっさん！！あんたの時代は終わったんだや！これで死んでくれッ！エレクトリック・アイ！！」

ズバアアアアンツッ！アランの上に巨大な凄まじい威力の稲妻が落ちた。アランを中心に煙が上がった。

「すまんわ、ワイにはやらなきゃあかんことがあるんや。恨まないくれ」

ナナシが後ろを向いて歩き出す。が、ゾクリと殺気を感じ慌てて後ろを向く。

「ガキがツッ！てめえらにこの時代はまだ重すぎだツッ！！」

ガッ！アランが勢いよく地面を蹴る。一瞬にして詰められた間合いからアランは拳をナナシにぶつける。

「ウエポンARM、13トーンボール！！」

その勢いのまま0距離で13のトーンボールをナナシにぶつけた。
「ガッハアア！！」

地面に倒れるナナシ、そしてアランが倒れているナナシの前に立ち、
ダガーARMを振った。

「チェックメイトだ…チェスのナナシ」

耳の部分の髪の毛を切り、そこから見えた耳にはチェスのナイトク

ラスを意味するイヤリングが見えた。

「か…完全に油断したわ…。今回のところは逃げさせてもらって…
アンダーター」

フツとナナシはその場から姿を消した。一瞬の戦いだったがアランはナナシの力が以前より遙かに強くなっていることを感じていた。

「関羽殿ッ！あんたみたいな義を持った男が何故ッ！

ギンッ！ガキイ！ガッ！と打ち合いながら典偉は関羽の行動に動揺を隠せない。一撃一撃が必殺の攻撃で、完全に自分の命を取ろうとしている技なのだ。

「はああああ！」

関羽が勢いよく振った戟が典偉の腹部を直撃した。典偉はそのまま岩場に叩きつけられた。

「ガッ…やっぱ強ええ…」

背中がズキズキと痛み、足が震えていた。頭部にも衝撃がいつて軽い脳震盪を起こしていた。そんな状態で関羽を相手にしていても、勝てるはずもない。典偉は背中中の出血を利用してそのまま死んだふりをした。

「死んだ…か」

関羽は戟をおろして典偉の方に歩み寄っていく。しかし、典偉から妙な違和感を感じて警戒をした。よくよく見れば、足が小刻みに震えているのだ。死んではいないと思い戟を持ち上げようとしたとき、
「どううらああー！」

ボグウッ！典偉の頭突きが腹にクリーンヒットした。ぐつとうめき関羽が地面に膝をついた。典偉は関羽の胸ぐらを掴むと、そのまま自分の叩きつけられた岩に関羽を叩きつけ返した。

「はあ、はあ、やられたことはやり返す主義なんだ…。じゃあな、俺は殿を探してるんで行くぜ」

大ダメージに動けずにいる関羽をその場に残して典偉は他の2人と合流しようとしていた。

「だっ！！」

克己が力強く踏み込み、花山の懐に入った。そしてそのまま喉、水月、金的、膝の掣肘線連撃を決めた。

「~~~~っ！！？」

本日二度目の攻撃にさすがの花山も苦しんだ。しかし、花山薫はそれで簡単に落ちるハズがなかった。苦し紛れにパパンッと克己に見えない拳をお見舞いした。

「おっと！そらッッ！！」

が、克己はそれが見えるかのように軽いフットワークでさばくと、次は克己が十発ほどの拳を繰り出した。

パパパパパパパパパンッ！！

花山の体が後ろに吹き飛ぶ。ガクンとついに膝をついた花山に克己は余裕の表情で言った。

「音速拳…。足首から膝へ、膝から股関節へ、股関節から腰へ、腰から肩へ、肩から肘へ、肘から手首へ、手首から拳へ…。これらの加速を成功させることによってだけ成せる技！！お前のような力任せなものなど当たり前などしないッッ！！」

克己がまたスツと構えた。花山はそれに答えるように立ち上がり、克己に突進していった。克己はシュツと迫ってくる花山の顎に回し蹴りを入れる。が、花山は立ち止まらずに克己に突っ込んだ。

「お前が怯まぬことなど分かっていた！！視界を一瞬奪えれば充分だッ！ちええええああああ！！」

スパパパアアアン！

花山の掣肘線に何発モノ拳と蹴りが入った。すべてが決まり、花山の動きがその場で止まった。

「あんたは…弱いッッ！！」

今度は立ち上がることが出来ないと思われた花山だが、克己の足を掴みそれを下に引っ張る力を利用して立ち上がった。

「ぐううおお！貴様ああ！！」

その力で克己の足のふくらはぎから足首までの皮膚が引きはがされた。そしてその一瞬を花山は使った。状態を捻りそのまま足首、膝、股関節、腰、肩、肘、手首の加速を使ったテレフォンパンチを克己に決めたのだ。

パッ！

克己の両耳から血が噴き出した。そして極度の頭痛と共に顔面が潰れた。音を遙かに超えた拳が克己の鼓膜と脳神経を狂わせたのだ。そのまま地面がひび割れるほど叩きつけられた克己……。たったの一撃だった。その一撃で克己は遠い世界へと連れて行かれた。

第16話：ヤムチャの戦い

「このまま…少し行けば魏軍の陣だが、どうも様子がおかしいんだよなあ」

ヤムチャは気を探りながらその方向へと飛んでいく。先ほどからかすかに気を感じるのだ。クリリンは後方を見ているため、ここはヤムチャが様子を見に行くしかない。

「やだなあ…、変なヤツがいたりしたら…」

スーッと近づいて見る…。そこは煙を上げてたくさんの人間が倒れていた。しかし、気を感じるのもう少し先のところと多少ずれた場所に位置していた。

「…！？あれは…！」

数々の厳しい修行を積んだヤムチャは五感が通常の人間より遙かに優れているために、遠くでも大体のものが見える。そして、見えた先にはあきらかに疲弊しきった兵士達が幾人かの将と共にこちらに駆けていた。

「魏軍…か？とりあえずジョジョに方向するかあ」

ゾクッ！ヤムチャは瞬発的に身を翻した。そこに気功波の類のエネルギー波が通った。ヤムチャは慌ててそちらの方を見る。

「て、てめえ…わ…。ベジータの片割れ…！」

目の前には、ベジータが地球にドラゴンボールを探りに来た時、一緒に2戦士を殺していった男がいた。

「ナツパだっ…！という俺もお前を知らねえがな」

ナツパは憶えていなかった。自分が使った栽培マンがさつさとヤムチャごと死んでしまったのだ。

「ヤムチャだっ！仲間の代わりに栽培マンと死んだ男だっ…！あんな雰囲気変わったな？」

ヤムチャは自分で説明して虚しくなった。そしてナツパの雰囲気が

変わっていることにも気づいた。何だか眉毛が黄色いのだ。あんまり似合っていない。

「ぐっふっふっふ……。俺はベジータに殺されてから怒りのあまり発狂寸前までいった。そして、完全なる純粋な悪としてスーパーサイヤ人になったのだっ!!」

ブンッ！ナツパがそう言うて消えた。その瞬間にはすでにヤムチャの腹に痛みが走り、ヤムチャは遠くの森に吹き飛ばされた。それを確認したナツパは自分のあまりの実力の上昇に酔いしれたようにニヤリと笑った。と、後ろから一人の男の声がした。

「びっくりしただろうがああ!!」

ビクッと振り向くナツパ、その瞬間に顔が熱くなった。バキィ！ヤムチャが殴ったのだ。そのまま吹き飛ぶナツパ。そしてヤムチャはその場でしばらく待っていると、ナツパがフラフラと現れた。

「な…な、何故だ…。てめえみたいなもやしに…一撃で…俺様が」
ヤムチャは鼻をほじりながら冷たい目でナツパを見た。

「そーいや、あんたは気を感じることは出来ないんだっけな…？まあ、教えてやるが俺が10000だとしたら、お前は3000程度のもんだ。…まっ目安だけだな」

ナツパの愕然とした顔は今でも忘れられないとヤムチャ氏は語った。

「ふ・ざ・け・るなあ!!」

口から嘔吐物みたいなエネルギー波を出すナツパ。ヤムチャはそれをギリギリの距離で、ちよつとセル戦の圧倒的な時の悟飯を意識して「かめはめ…波アアッ!!」

ドガンー！間に合わなかった。しかしそれでもヤムチャは多少服が焦げたくらいの傷しか負っていない。

「ゲホッ！ゴホッ！もうちょい早くないとかめはめ波がでねえ…」
ナツパの攻撃は全力だった。そしてヤムチャには全然ダメージがない。ナツパは悔しそうに拳をニギリブルブルと震えると、空に向かって叫んだ。

「遠呂智様ッ！！どうか俺に力をくれえ！もう地獄なんて嫌だッ！」
ヤムチャがポカーンとした顔で見ていると、空からナツパに向かつて一筋の光が落ちた。ナツパの周りが金色に輝いていた。

「俺はスーパースイヤー人を越えたぞおお！」

ナツパが元気よく叫んだ。ヤムチャもナツパの姿をみて驚きを隠せない、ナツパから髪の毛が生えていたのだ。以前ヤムチャもこの現象を見たことがあった。悟空がサイヤ3になったときのことだった。悟空には最初から髪の毛はあったがそれが伸びていたということだが…。ということは、ナツパは少なくともサイヤ3にはなっているのだった。

「死ねええええ！！！」

ドンッ！ナツパが勢いよくヤムチャに突っ込んできた。ナツパのブロワーがヤムチャに決まる。そこからナツパのラッシュが始まった。連続で何発もブロワーをたたき込むと、蹴り上げ、素早く上に上がり、おもいつきりたたき落とす、落ちていくときに横からおもいつきり蹴り、蹴り上げ、また叩き落とす、そして今度はエネルギー波を何発も何発もヤムチャに打ち込んだ。

果たしてどうなる。ヤムチャの運命。

第17話：ヤムチャ

ヤムチャが戦闘中の時、ジヨジヨと八雲達はいうと。

「……？遠くで爆発音が聞こえたが？」

承太郎はスタープラチナの精密な目で遠くの空を見た。そこには特に何も写っていない。八雲も同じ方向を見る。

「大丈夫だろう。ヤムチャが前方全体を見ているからな、それにしても前から来るあの軍勢は魏軍か？」

スタープラチナの目も捉えている1000程の数の兵士達は明らかに戦意喪失をしていた。このままもし戦闘になっても、大した被害もなく鎮圧出来る。承太郎は側にいる兵士に何か呟くと兵士は御意と言うと後ろへ走っていった。

「八雲、向こうがしかけてきても闘うな。最悪でも俺、八雲、クリリン、ドモン、趙雲、真田で抑えるぜ」

そこへドモンが木から下りてきた。ドモンは少し慌てたように2人に素早く事を伝えた。

「魏の大將が東の方へと逃げて行つたみたいだ。側近とかは一緒にはいないみたいだな。完全に一人で逃げている」

ドモンがどうする？と言うふうに承太郎に問いかけた。承太郎はしばらく考える。今ここで戦力を分散するのは極力避けたいのだ。追撃にもすぐに対応出来る布陣で常に戦闘態勢でいられるようにするためには、趙雲や真田などの兵を率いる戦闘に長けている者を行かせるわけにもいかない。承太郎が悩んでいると、それを見透かしたようにドモンが言った。

「俺が行つてやろうか？」

承太郎はドモンに不安を感じた。クリリンが武術には長けていると言っただから、強いことは明らかなのだが、どうにもまだ信じ切る事が出来ないでいる。

「その情報は……確かなのか？」

ドモンがピクリと反応する。ちつと舌打ちすると自分が降りてきた木を殴った。その瞬間に男が一人落ちてきた。

「遠呂智側の追っ手だ。信用出来ないならもう一度そいつをたたき起こして聞いてやるうか？」

承太郎は首を振った。すまないと言詫びると今度はドモンに曹操との合流を頼んだ。

「俺たちは今から魏軍と交渉して、魏軍の城へ陣を据えるつもりだ。そこに来てくれ」

ドモンは何も返事をせずに指をパチンと弾くと叫んだ。

「来いッ！ガンダアム！！」

少し離れた場所に巨大な口ボが現れた。承太郎も八雲も全ての兵士達も驚いてその場で時間が止まったかのように固まった。しかし、ドモンはそんなことは気にもせず、指笛を吹いた。

「風雲再起！！」

そして今度はどこからともなく綺麗なそして逞しい馬が現れた。ドモンはそれに飛び乗りそしてガンダムと呼ばれるものに乗った。

「はーはっはっは！すごい！すごい力だ！」

ナツパは嬉しそうに大笑いしていた。ヤムチャが落下していった場所には砂煙が巻き起こり、周りの木々は吹き飛んでいる。そして、少しずつ吹き飛んだ地面が見えてきた。

「ん！？しぶといやつだな！！」

地面にはボロボロのヤムチャが苦しそうに立ち上がっていた。急なパワーアップに体が戦闘準備も出来てなく、ダメージをもろにくらってしまったのだ。

「ハア…ハア…くっそ…、なんてこった。ちっ！休む時間はくれないのか」

ナツパはヤムチャが生きていることを確認すると、直ぐにヤムチャに向かって突っ込んできた。

「死ねえええ！！」

「くそがつ！界王拳ツツ！！」

ググッ！ヤムチャのスピード、パワーが上昇した。ナツパの豪快なパンチを受けながらナツパにも豪快なパンチを返す。2人が吹き飛ぶ。

「なんだツツとお！？」

ナツパは素早く起きあがりヤムチャを見る。ヤムチャは口を切ったもののその場に立っていた。

「俺の番だツツ！」

ズアッ！ナツパに突っ込んだ。そのまま腹に連打を入れる

「狼牙風風拳ツツ！！」

ズバババババツ！！ドガッ！ナツパが血を吐きながら岩に激突する。そしてヤムチャがそこから追い打ちをかけようとするが…、

「ぐっ！？限界…か」

ガクリとその場に膝をついた。体全身がズキズキと痛みだし、筋繊維がボロボロになっていてるのを感じた。ナツパはヨロヨロと起きあがりそれを見て嬉しそうに笑った。

「ふっふっふ…俺の…勝ツツ…」

ブオッ！ナツパがいきなりエネルギー波に飲まれて消えた。

「！？誰だっ！」

ヤムチャが正体を探すが、後ろからの殺気に振り向くことが出来ない。

「（振り返ったら…殺され…るツ！？）」

後ろに立っている男が口を開いた。聞き覚えのある声と圧倒的な戦闘力…。

「ヤムチャ久しぶりだな？おめえもこっちに来てたのか？クリリンも一緒か？」

ヤムチャは信じられなかった。この男からこれほどの邪悪な気を感じるなどないと思っていたからだ。こちらが少しでも気を高めて抵抗を示した瞬間首を蹴り折られるとイメージ出来るほどの殺気だった。

「ああ…一緒だ。冗談だろう？殺気を消してくれよ…。…悟空」
後ろで笑ったのが分かる。そして気も高まった。

「おめえは質問に答えれば良いだけだ。質問はするな…。遠呂智の
ところへ来い」

ヤムチャは黙った。悟空の機嫌が悪くなったのを背中を感じた。

「もう一度だけ言う…。遠呂智のところへ来いよ」

ヤムチャは笑った。

「俺は俺の道を進む…。悟空これだけは言っておいてやるぜ！…遠
呂智は間違っている！そしてお前もな！悟空ツッ！」

バキイイイ！ヤムチャが首をおかしな方向に曲げて吹っ飛んだ。
ヒクリと痙攣をしたまま起き上がってこなくなった。

「オラは間違ってなんかいいえ…。じゃあなヤムチャ」

そして悟空は消えた。

第18話：決別したモノ達

クリリンは後ろの景色を眺めていた。これといって目立つ者もなく、先ほどドモンの乗った巨大な機械が馬に乗って通り過ぎたくらいだった。

「こうやって見てると…平和そのものなんだけどなあ」

クリリンはスーッと舞空術で進みながら当たりを見渡す。ゾクリ…前方の遠いところで懐かしくそして邪悪な気を感じた。そこにヤムチャの小さい気もある。

「この気…ま、まさか…悟空ツツ！！？」

ドンツ！一気にクリリンはその場からそっちへと飛んだ。

クリリンは混乱していた。今までスーパーサイヤ人になった悟空からもこんな邪悪な戦闘力は感じたことなどない。そして今、感じたことだがそこにあつたヤムチャの気が物凄く小さくなったのだ。そしてそこからどんどん離れていく悟空の気、多分自分に気づいているのにそのまま離れていくことにもクリリンは困惑した。

「ヤムチャさんっ！！大丈夫ですかツツ！？」

白目を剥いて完全に意識が無くなっているヤムチャ、見た瞬間にわかるほど首の骨が折れている。クリリンは仙豆を持っていない。気持ちを落ち着かせて当たりの気を探してみる。誰かいるかもしれないという微かな希望だった。

「……………あつた！3、4つか！」

クリリンはそこへ向かった。理由はしつかりあつた、1つの気が小さい気に触れるたびにその気を持ち主達が力を取り戻していたのだ。ザッ！クリリンがその4人の前に現れた。4人とも体の大きい者達で、格闘術に長けているもの達と一目見て分かった。

「あんた…だれだい？」

その中の一人の男が警戒したようにクリリンに質問をした。しかし

急いでいるクリリンはそれに答えている時間はない。

「今、回復術を使っていたのはどなたですかっ!!」

男達の中の警戒心が高まっていった。

「俺だが…、なんでだい？」

煙草を吸っている男が何かアクセサリーみたいなモノを手に持って見せた。

「俺の仲間が死にそうなんだッ！事情はしっかり説明する！頼むッ！お願いだ…力を貸してくれっ！」

煙草の男の目が鋭くなる。今、この世界では味方だったヤツも敵になるのだ。知らないヤツを簡単に信用なんて出来るはずがなかった。と、そこに一人の男が現れたのだ。

「これは！クリリン殿！ん…？貴公は典偉殿でありますか？」

奇跡だった。趙雲が見回りでたまたま現れたのだ。趙雲が事のいきさつ、曹操のこと魏軍とのことを話す。4人は典偉の顔見知りと言うこともあつて、趙雲のことを信用した。

「ほう…。で、その死に損ないはどくだい？」

クリリンは煙草の男を急いでその場に案内した。

「……うつ、ここは？」

ヤムチャは天井がある部屋で目を覚ました。ズキツと体が痛む…。

しかし首は軽く痛みはするものの何ともなかった。

「目が覚めたか？」

そこには八雲が飯の入ったお盆を持って立っていた。ヤムチャは頷いて体を起こすと、その盆を受け取った。

「何があつたんだ…？クリリンから聞いたお前の傷は戦闘によるものだと聞いている」

ヤムチャは少し考えるように下を向くと、八雲にクリリンもこの場に呼んで欲しいと頼んだ。八雲は頷いて立ち上がると、部屋を出て行った。

「悟空…お前は…何がしたいんだ？わからねえよッッ!!」

「ヤムチャさん…」

クリリンが八雲と一緒に部屋に入ってきた。そして2人はヤムチャのそばに腰を下ろすと、ヤムチャが口を開くまでただ黙って待っていた。

「クリリン…俺は悟空に会った。そして殺されかけた」

クリリンはあまり驚きを見せなかった。そして自分も悟空の気を感じたこと、そしてその気に邪悪なものを感じたことを話した。八雲は2人の話を聞いていると、悟空という男が異常に強いと言うことと悪であることしか見えてこない。

「すまん、俺はその男を知らない。詳しく教えてくれないか？」

八雲が説明を求めるとクリリンが悟空とのことを話した。

「悟空と最初に会ったのは、武天老師様の…俺と悟空の師匠のところにいった時でした。力が物凄く強くて、勉強以外の修行は直ぐに効果が出てどんどん強くなる不思議なヤツでした。

大きくなって、地球を征服しようとする魔王、他の星から来たサイヤ人、そして集めれば何でも願いの叶うドラゴンボールを悪用するヤツ、それを作った星まで行って悪の帝王も倒した…。ただ純粹に優しく、とても強いヤツです。

悟空も他の星から来たサイヤ人なんです。サイヤ人はもともと戦闘種族といって闘うために生まれてきた人間です。年をとるのも俺らの何十分の一の遅さで、闘う程強くなっていく…。ですが、悟空はみんなのために闘っていた。あいつの気から邪悪な気なんてほとんど感じたことなんてなかった…。なのに…俺らにもわからないんですよ…」

優しい…八雲も優しい男を知っていた。自分と同じ血が流れている男だ。今では全く別の道で敵同士で生きている。悟空のことは多少分かった八雲は、2人に今度そいつにあったときは油断は絶対にす

るなどと言うと、部屋を出て行った。

「話しは終わったのかい？八雲」

部屋を出て廊下を歩いていると男に呼び止められた。煙草を吸っていた男だった。

「アラン…か、魏軍のことはお前を行かせておいて良かった。何かようか？」

アランは煙草を捨てると、鋭い目で八雲を見ながらすれ違い様に言った。

「それぞれに闘う事情があるみたいだぜ…。情を捨てたお前の様な闘いを全員が出来るわけじゃねえんだ！そんな厳しくしてやんな」
アランはそう言うとそのままだこかへ行ってしまった。

「分かってる…。俺だって事情はあるんだ！！」

八雲はその場で拳を握りしめた…。

第19話：遠呂智降臨

「城の周りの状況に変化あるか？」

ここ数日間は何も戦などは起こらないで平和に兵士達も休息をとっている。偵察を任されているクリリンはヤムチャが回復するまで、一人で周囲を警戒していた。

「いや、特になにも気になるモノはないですよ。だけど…何だか大気というか、この世界の空間そのものが安定してないと思うんです。このまま警戒は必要ですね」

承太郎は頷くと考えるように立ち去った。クリリンも自室に戻ってイメージトレーニングを始めた。

「（何かが来る…、とてつもなく強大な力？……まさか…な）」

クリリンは違和感を全身に感じてトレーニングに集中出来ないでいた。近いうちに必ず何かが起こると感じていた。

「戻ったぞ」

ドモンが八雲の前に現れた。そしてその後ろにはこの城の城主である曹操が立っていた。八雲は曹操を見た瞬間にある男を思い出した。織田信長である。戦の天才、最強の名将である。すでにこの世にはいないが、この曹操という男から感じる霸道は信長と全く同じだった。

「貴公が陸奥八雲か…、あの男とうり二つだな。わしになんのようだ」

八雲は自分では力のある者達を完全に使いこなすことは出来ない、自分の代わりにこの軍の指揮をとって欲しいと頼んだ。

「面白い男だ…。わしが遠呂智にすでに降っているかもしれないのだぞ？」

八雲は曹操の深い眼を見て笑った。

「それはないな。俺はお前みたいな男を知っている。そんなことは

「お前が首を飛ばされて死ぬくらい有り得ぬことだ」

曹操も面白いというように笑う

「よかるう。この軍これをもって曹操が預かる！遠呂智を根絶やしにする！今は小さくとも我が覇道は遠呂智をも飲み込むだろう！！今からこの軍は【神轟】と名乗る！！」

「曹操という神をこの世界に轟かせる…か」

「来るツツ！？」

クリリンがバツと外へ出た。そこには黒い稲妻が一閃地面に落ちて、当たりを飲み込むかのように空間が歪んだ。

「どうし…ツ！？なんだあこいつぁー！！」

克己が次にやってきた。そして後から他の者も来た。全員がその歪む空間を凝視したまま動かない、緊張が全員を包み込んでいた。そしてそこから人が出てきた。

「おうおう、集まってんじやねえか…。血が騒いで来たぜ」

愚地独歩が最初に現れ

「ふんっ、阿呆共が良くもまあこんなにいたもんだ」

東方不败が現れ…

「カス共が！あの日の怒りわすれんぞ」

呂布も姿を現した。そして…

「……………」

不破虎彦が現れた。

「親父いい！！そんなとこで何してんだぁ！」

克己が独歩に怒鳴る、しかし、独歩はんぐ？と耳を傾けると笑った。

「おめえには関係のねえことだツ！やめさせなければおいらを止めることだなぁ」

バツ！すでに克己が間合いを詰めていた。上段突きをフェイントに足の甲に足刀を落とそうとした瞬間…。ガッ、ゴッ！右肩と顎にワンツ一の突きを決められて吹っ飛んだ。

「ぐっ…」

克己はその一回の攻防で力の差を見せつけられた。身を引くと、構えてまた皆と同じ戦闘態勢に入った。

「東方不敗マスターアジアッ！！」

ドモンが地が震える程の声で叫んだ。東方不敗が笑い、ドモン、クリリン、ヤムチャが東方不敗を前に構えた。既に3人は体にビリビリと東方不敗の気迫を感じていた。そこから一步でも踏み出れば一撃を貰いかねないとまで感じている。

「呂布殿ッ！もう一度我が武お受け頂く！！」

趙雲と真田…そして典偉が呂布の前に立った。しかし、3人で向かい合っても勝てる気が正直しなかった。

「久しぶり…というところか？」

八雲が虎彦と向かい合った。すでに2人の間合いでもある。どちらかが先に仕掛ければそこで死合いが始まる程の緊張感があった。

「すでに不破は陸奥を超えている…。そして俺は遠呂智を勝たせるためにお前も曹操も殺すぞっ！」

八雲の表情が和らいだ

「遠呂智…。その姿俺は見たことがない！すぐに振り返りにしてやるさ」

その瞬間、敵味方問わず全員の体がガチッと固まったように動かなくなつた。術などではない、物凄い重圧を受けたからだ。

「お前が八雲か、聞いている。その修羅の血…勿体ないのだから」

そこから2人の姿が現れた。1人は承太郎が一度あつた女だった。姐己という名の女で、以前承太郎と闘い承太郎を完全に負かせた。そしてもう1人は男とも女とも付かない雰囲気を持ち合わせ、そしてこいつから激しい重圧を感じた。

「遠呂智…か…？」

承太郎が小刻みに震えながらそいつに名を聞いた。すでに聞くまでもない事実だが、全員は祈つたほどだった。そいつが遠呂智でないことを…

「そうだ…我がこの世界の魔王遠呂智だ。我に抵抗する勢力に少々挨拶をしにきた」

ふっと重圧が一気に緩んだ。その瞬間、八雲、刃牙、克己、アランが遠呂智に攻撃を仕掛けていた。

「エア…ハンマーツ！」

ズガンッ！しかし遠呂智は微動だにしていない、そしてアランに対して手を一振りすると、アランの体中に切り傷が無数に出来、吹っ飛んだ。

その隙を利用して、克己が音速拳を何発もたたき込み、刃牙が延髄を狙って蹴り、八雲が遠呂智の腹に拳を打ち込み、圓名流【無空波】を打ち込んだ。

「ガッ…」

克己が膝をついてその場に倒れた。刃牙の体に衝撃が走り地面に叩きつけられるように落ち、八雲の胴着の肩が吹き飛ぶと同時に血を吹き出した。3人がその場に倒れる。まさに一瞬だった。誰も遠呂智が何をしたのかも分からない、遠呂智は承太郎を見ると言った。

「まだ潰さないでいてやろう…。力をつけて我に向かってこい！」

そして遠呂智達は姿を消した。誰もその場を動けなかった…。

第20話：死合い

「く…なんだよあれ！勝てっこない！！」

ガッツ！と、クリリンが地面を殴った。全員が自分たちより遙かに強かった。克己が独歩にしかけられたのがすごいくらいだったのだ。そして、遠呂智にやられた4人がゆっくりと体を起こした。

「ぐっ…おかしい…！俺の音速拳は確実にヤツより早く出せていた…」

「久しぶりに…死を感じたぜ！あれはARMじゃねえ…」

「確実に即死のタイミングだったんだけどな…。こんな圧倒されたの…って」

「圓名流を遙かに凌駕されていた…」

全員が初めて感じたほどの無力だった。これだけの猛者が揃っていたら、今の段階でかなり戦力差を縮められたと誰もがおもっていた、しかし現実には圧倒的なまでの敗北と実力差だった。遠呂智は勢力も兵の数も全てを遙かに上回っていた。

「者共オオ！臆するでない！我らが覇道はまだ始まったばかり…」

この世界にはまだ遠呂智を脅かす者が必ずいる！そやつらと手を組む！！」

曹操が全員に喝を入れると共に次なる行動を言った。そして曹操が1人で城に戻り始めると、怪我を負った者もそうでない者も城へと引き返した。

「曹操さん。この世界は物凄く広い！俺が三年間使って出来たのは、ここから…ここまでの範囲だ。遠呂智がどこにいるのかも掴めていない」

八雲が傷む身体を起こして地図を広げてみせる。曹操もその隣にい

る承太郎もその地図を見つめる。

「…本多平八郎忠勝って知ってるか？」

承太郎が急に1人の名前を口にした。そして地図を指さすと、ここから西へ三日ほどの距離に何処かの紋が記されていた。

「ここの大将さんがそうなのか？」

承太郎は難しい顔をして頷かなかった。しかし曹操はそこに短刀を突き立てると八雲に

「二日後ここへ向かう！そして連合軍を設立する！！」

と言い放ち部屋を出て行った。承太郎はそれから部屋を出るまでずっと難しい顔をしていた。

「ハッ！トリヤッ！」

「よっ！おっと！おりゃ！」

クリリンとドモンが組み手をしている。ドモンのジャブから蹴りの連携を軽く受けて掌低で打ち返す。

「ちっ！ハアアアア…ハッ！」

勢いよく地面を蹴り、ドモンの手刀がクリリンの首を捉える。吹き飛ばすクリリンを追ってもう一度地面を蹴ろうとした…

「太陽拳ツッ！！」

一瞬にして眼が眩んだ。目を押さえて体を丸めるドモン、そして微かに視界が回復した時に目の前はクリリンのエネルギー波が迫っていた。

「ハッ！タア！」

バババーン！！全てを素手で破壊して、反撃に移ろうとした…

「まだまだ粗いぜ？ドモン！！」

背後からの声と衝撃がドモンを襲った。そのまま壁に激突して座り込んだ。ドモンは地面に唾を吐くと悔しそうに立ち上がり

「俺とお前…一体どれくらい差がある？」

クリリンはその言葉に首をかしげて言った。

「ドモンさんの方が多分上じゃないかなあ？でも、俺の方が実戦経

験も豊富だし、その場の状況判断もすぐれてると思う。それにドモンさん、もつと冷静にならないとね」

ドモンの目つきが変わった。そしてクリリンに近づくと、胸ぐらを掴んで

「分かったようなこと……!!」

と吐き捨て戻っていった。クリリンはふてくされた顔をして背を向けるドモンに

「あんたが聞いたんじゃないか」

と言って、その場を去った。

「克己さん……一体何時間そうやっていたんですか？」

ムアツと蒸す部屋に克己が胴着の姿で順突きを放っていた。それも既に刃牙が来た頃には何千も何万もやっていた。

「親父に最初に見せられた空手がこれだった。一日に一本でも良い、十本でも、百本でも、これをやれば絶対に強くなるって教えられた」
刃牙は休まずに続ける克己を見て、自分がまだ死刑囚やジャック、猪狩などと闘う前の修行に明け暮れていた日々を思い出した。

（あれは……なんのための修行だったんだっけ？……親父？俺は親父より少し強いだけで良い。だけど、今は親父は遙か彼方の人物。今ここで正拳を放っている人物ももしかしたら、俺より強くなってるかもしれない。ここに来てから俺はまともに死の間合いで殺りあったことがない……な）

刃牙はフウッと溜息を吐くと、克己に向かって

「俺と死合ってください」

と言った。克己は嬉しそうに笑う、その瞬間刃牙の目の前の世界は大きく揺れていた。

第21話：負けの後味

膝の関節が綺麗に抜ける感覚がする。同時に腹に衝撃が走り、口に酸っぱいものが上ってくる。

「ひぐつう！ッ~~~~！！！」

その場に崩れ落ちるチャンピオン…。いや、今は刃牙とだけ言った方が正しいだろう。

そして、崩れた刃牙の顎に克己の外回し三日月蹴りが入る。

ペシッ！と軽い衝撃…。しかし、武道家の蹴りが顎に入った時点で脳は激しく揺れる。

焦点の合わない目と思考で刃牙は動いた。

「（ダメだッッ！負ける！？嫌！…逃げる）」

克己は追わなかった。ただ刃牙が離れるのをその場で見つめているだけだった。

「そうだ…負けるくらいなら逃げろ」

克己は刃牙が離れるとようやく構えをとった。油断などどこにもない完璧な構えで刃牙を見る。

「すごい…！すごいよ克己さん！！オレも本気で…」

「だしッッ！！！」

バチィ！

克己の拳が刃牙の顔面に沈んだ。そして、勢いに乗り一気に片を付いた。

刃牙は薄れゆく意識の中で

「（こんなに優しく綺麗な空手…が痛い…オレって…弱いや）」

そんなことを感じていた。

刃牙が克己に手も足も出せずに負けた。しかし、克己はそこに嬉しさよりも悲しみを感じてしまった。

「（刃牙…違うだろ！！お前はこんなに弱くなかっただろ！！）」

怒りを壁にぶつけて克己は部屋を後にした。

刃牙は身なりを整え、門を開けた。

「刃牙どこ行く気だ？」

アランの声が後ろから刃牙に届いた。しかし、刃牙はその声に対して、なにも反応することなく門を出る。

刃牙は少し歩いて立ち止まり

「アランさん…オレはあなたとも闘ってみたいな」

そういつてまた歩き始めた。

「刃牙…、若いな。失って分かるプライドなんて捨てないと最強へ

なれねえ」

アランは刃牙の背中を見えなくなるまで見送り、門を閉めた。

一方では真田と超雲が承太郎が話し合っている。今回の本多軍への接触を最小限の戦略で向かいたい承太郎は、2人にどのような形がベストか聞いているのだ。

「兵を動かすのに長けた、私が真田殿どちらかは行った方が良いでしょう」

「そうだな……。そして、もう一人はこの指揮に徹するとしたら良い」

「そうか……。やはり2人を連れてくつてのは無理か、真田さんは一緒に来てくれないか？超雲さんにここは任せる」

2人は頷いて、側にいる自分たちの兵に耳打ちをして、その場から離れさせた。

「承太郎殿！出来れば、他に数名武に精通したものを」

流石に数で攻められてしまえば、超雲でもやられてしまう、その心配をしていた。

「ヤムチャ、クリリン、ドモンを使ってくれ」

承太郎はそう言うと、曹操に伝えるために部屋を後にする。
本多との接触まで承太郎は不安に押しつぶされそうな気持ちでい

た。

第22話：一筋の光

「そうか、では本多の下へと我々は向かう。そして遠呂智を討つために同盟を結ぶのだな？」

承太郎は軽く頷き、曹操の目を見つめると少し眉をひそめた。

「俺は、本多は呂布にも並ぶ猛者だと聞いている。簡単にこちらについてくれるか…。力を持つものはそれ以上と闘うために動く、最強は最強のところへ行ってしまうことも…」

承太郎は、溜息を吐くと首を振り

「申し訳ない。これから同盟を結ぶ者に失礼だったな」

そう言つて、部屋を出て行った。

「…、最強は最強のところへ…か。そうとも限らぬものさ」

「それじゃあ、気をつけてな」

ヤムチャが八雲に声をかける。八雲はそれに答えるように軽く頷くと、顔を引き締めて大声で叫んだ。

「我らはもしかすると、敵の陣地へと自ら足を踏み込むことになるかもしれない！！しかし！味方となれば遠呂智もそう簡単には攻撃を向けられないハズだ！いくぞ！世界の理を壊す者を討つための…これが始まりと言える！！」

八雲がそう言いきった瞬間、城が揺れるほどの大歓声が起こった。

兵士は1人も臆することなく、これからの事に立ち向かう者だった。

「では…、城を任せたぞ！！」

曹操はアランに一言そう言つて、先陣を駆けた。

「あれ？アランさんはこっちに残るんですか？」

クリリンが城内に戻るとき、アランに話しかけた。アランは煙草に火を付けながら、クリリンを見ると一個だけ指輪を渡した。

「？なんですか？」

アランがそれと同じものを手に1つ付けた。

「ARMだ。良く見てろよ？これが俺様の力だ！！」

握った手が光を帯びて、そこから光が形となりアランの手の中に現れた。

「ウエポンARM…【バトルスコープ】」

クリリンと側にいたヤムチャが驚いたように、それを見つめている。そして、クリリンが自分の手の中にあるARMを見つめたまま、アランに聴いた。

「俺にも出来るんですか…？」

アランは一瞬呆けた顔を見ると、しらねえと一言いつてやってみるように促した。

「とりあえず…俺の世界にいたときの魔力つてものは、お前らの氣つて言うのとリンクしている見たいなんだ。だから、お前らの氣が大きければ大きいほど、それにある程度の比例で魔力もあるはずだ。まだ、良くはわからないんだが…」

クリリンは指輪を握る手に気を集中し始めた。ググググ…と手を中心に氣が集まり始める。しかし、指輪は何も反応をしめさないままだった。

「ふう…俺には出来ないみたいです…。すみません」

クリリンが申し訳なさそうにARMをアランに返そうとすると

「な、なあ？俺やつてみても良いかな？」

ヤムチャが少し遠慮氣味にARMをクリリンから取った。そして、ヤムチャがその指輪を少し見つめて目を閉じる。

「（…！？魔力の波長が重なってやがる…！？こいつ…！）」

アランが驚きの表情でヤムチャを見つめている。そして、ヤムチャの手には指輪ではなく一本の短剣が握られていた。

「ほお…、やるじゃねえか。感覚は掴めたか？それで良い」

ヤムチャはアランから2つのARMを受け取った。それはアランがこれから起こる、様々な危険を想定してのことだった。

「わしらはこれからヤツらの本陣に少々牽制をしてくる…、構わぬな？遠呂智よ」

東方不敗は既に準備をしており、内にある闘争心を高めていた。

「構わぬ。しかし、出過ぎた真似はするでないぞ」

東方不敗は何の素振りも見せず、遠呂智の前から消えた。

第22話：一筋の光（後書き）

だいぶ遅れての更新となりました。
まだまだ話しは続くので長い目で見守って頂ければと思います。
そして新年おめでとうございます

第23話：本多

承太郎達が城を離れて2日と半日が過ぎた。

「偵察からの報告によると、本多の陣は物音1つしないらしい」

八雲が承太郎と曹操に警戒を煽った。

3人の間に色々な考えが交錯する。しかし、それを知るには本多の陣を見ないことには始まらない。3人は予定通りそのまま進軍することにした。

「八雲殿！本多軍の陣が見えましたぞ！しかし、灯りは中央に小さいものだけです。」

曹操が急に大声を出した。

「八雲、趙雲！！騎馬隊を連れて本多の陣へ走るのだ！！」

騎馬隊がざわつく、しかし八雲と趙雲は瞬時に馬を走らせ先頭に出る。すると、騎馬隊もそれに続いて一気に動いた。

「大将さんは一体なんのつもりだ？」

八雲は曹操の言葉の意味を理解していなかった。それは趙雲も一緒に、2人はどんどん近づいていく…。そして門をくぐった時に理解したと共に、目の前の光景に言葉を失った。

「うおおおお！！」

「でいりやあああ！！」

熊のようにデカい男が2人、自分達と同じ背丈ほどの戟をぶつけ合っていた。

片方が振り下ろす戟を打ち払い、今度は逆に薙払おうとする。それを戟を縦に構えて受けると、押しのけてやり返す。

完全に互角の闘い、そして趙雲と八雲を圧倒するほどの技と速さ…

そして力だった。

「こ…これは、呂布と本多か？」

八雲の言葉は趙雲の耳には届いていない。趙雲は既に2人の闘いに集中していた。

一歩も引かない両者だが、遂に戦況が動いた。

『ばきいいん』

ぶつかり合った刃が両者の激しいぶつかり合いに悲鳴を上げて折れた…、いや、砕けた。

「…フン、こうなれば仕方ない。この勝負は預からせてもらうぞ」

「楽しい闘争だった！！お主に預けたぞ！我が名は本多平八郎忠勝！！」

「呂布…呂奉先」

呂布は名乗ると八雲達には気づいていないのか、目もくれずに立ち去った。

遠呂智サイドで…

「東方不敗さんよ…、まさかあ1人で楽しみに行くんじゃないかなあ？」

暗く長い廊下の壁に寄りかかっている男が、東方不敗を見た。背丈はそう高くないものの、その体から満ちあふれる闘気は、異常なまでに研ぎ澄まされており、下手に触れようとすれば怪我ではすまないことを告げている。

「すでに聞いておるようだな。特に1人で楽しむつもりなどない、来るなら来ればよからう」

東方不敗は男にそう告げると、そのまま廊下を進んでいった。

「へっ、それじゃ久しぶりに戦いつてのを楽しめそうだ」

男がユラツと動く、その顔から眼帯が覗いた。

「守るって言うても…、攻め込まれなければ、これといってやることもないですね」

クリリンが少し退屈そうに空を見上げている。ヤムチャはアランからもらったARMをずっといじっていた。

「そんな物騒なことというもんじゃない。平和ってのも良いモンだぜ？」

クリリンがその声に振り返る

「ああ、克己さん！残ってたんですか？」

克己は頷くと2人に自分の組み手の相手を頼んだ。

「2人で…？ですか？良いですけど、そこまで手は抜けませんよ？」
「構わない、逆に手を抜かれては困るんだ。あのビームみたいのも使って貰って構わない！始めるか！」

克己とクリリンとヤムチャが庭に向かい合った。

ググツ、と克己が身構える。クリリンもヤムチャも構えた。

「来いッ！！」

シャツ！

同時にクリリンとヤムチャが消えた。克己の目の前にいきなり現れる。ヤムチャの蹴り、クリリンの拳。

「おっと、こいつああ！！？」

フツと間合いを取って、2人の攻撃をかわす。

「（すごい！？俺とヤムチャさんの攻撃を完全にかわして、バランスが崩れもしないのかっ！？）それなら！！」

クリリンが一気に飛び上がる。ヤムチャがその行動を悟り克己との間合いを取り直した。

「クリリン…もう仕掛けるか…」

「かめ…はめ…波アア！！」

クリリンの手からエネルギー波が飛び出した。克己はそれを少しも動揺することなく、迎え撃つ姿勢を取る。

「（来たッ……！気は相手の集中力と体のエネルギー……。それは波動として現れる……！その波を打ち消すのは）……今ッッ……！」

ブワアアア……！

克己の拳とかめはめ波が衝突した。驚いたことに、克己の拳に当たったかめはめ波はそのままどこに行くことも、克己に当たることもなく消え去った。

「……すごい！あの人は武の天才だ……！」

クリリンもヤムチャもその場で克己から目が離せなかった。その克己はクリリンを見ると笑った。

「ははっ！出来たぜ！これで近代空手の道を一歩進めた」

克己は嬉しそうに言った。しかし、その……笑顔が一瞬で消えた。

「よお、また合ったなあ」

「ドモンの仲間か……」

「おう、強ええ奴あ……どこだ？」

急に現れた3人によって。

第24話：2人の眼帯男

空気は張りつめていた。克己、クリリン、ヤムチャはその場で、その3人と睨み合っていた。1人は見覚えのない奴だったが、とてつもない威圧を放っていた。

「おう、お前らまとめてかかってこい、殺し合いを楽しもうぜ」

眼帯を付けた男が、一歩前に出た。シャラン…。と、鈴の音が足音のようになる。もう1人の眼帯を付けた男、愚地独歩は、その男を少し驚いた顔で見つめた。

「おいおい、あんちゃん待とおぜ？おいらも東方さんもよ、戦いを楽しみに来たんだぜえ？独り占めはよくないぜ」

男は手に握られてる刀を肩に乗せて、つまらなそうに溜息をはいた。

「しょうがねえ…。じゃあ、どいつでも良いぜ？かかってこい」

そういつて、地面を斬りつけるように刀を振り落とした。

「ッ！？こいつ…！！異常だぞ！クリリン！俺と克己に任せて、ドモンと趙雲とアランの旦那を呼んできてくれッ…！！」

鈴の眼帯男から発せられる異常なまでの威圧に、ヤムチャは今の3人では束になっても敵わないことを悟った。

「ぐっ…、すぐにもどります！」

クリリンはそういつて、その場から急いで城へ戻って行った。

「お主らに任せても、ここの城は問題なさそうだな。では、城の建物でもしてくるか」

東方不敗は、独歩と男がやる気満々なのを見て、自分の出る幕がないと悟と、城の方へ歩いていった。…が、それをヤムチャが見逃すハズがなかった。地面を蹴って、東方不敗に詰め寄る。

「てめえ！！待ちやがれ！！」

東方不敗に拳をぶつけようとした…、しかし、東方不敗にギリギリのところ、他の手がヤムチャの拳を抑えていた。

「殺し合いなら、俺と楽しもうぜ!!」

ドンッ!!とヤムチャは一気に気圧された。あまりの存在感に異常なまでの戦慄をヤムチャは感じていた。

「あゝ、一応名乗っておいてやるぜ…。十一番隊隊長、更木剣八だッ!!」

更木剣八…。ヤムチャにはわからないが、十一番隊ということとは、他にも最低10人はこの男と同じような奴らがいることなのだ。

「くっ…。俺の邪魔をするなあああ!!波アア!!」

ほぼゼロ距離からのかめはめ波に、剣八は瞬時に片方の手でそれをはねのけた。

「おもしれえこと出来るじゃねえか、破道みたいなもんか?」

ヤムチャはかめはめ波を打つ構えのまま、そのまましばらく呆然としていた。強いとか弱いの違いじゃない、この男と対等に闘える気がしなかった。

「じゃあ、次は俺の番だなああ!!」

ブオッ!風を切り裂く太刀筋、ヤムチャはそれを紙一重で後ろに飛び退けた。

「ぐっ…。こいつはッ!!」

触れていない、ギリギリでかわしたはずなのに、服が着られていた。このままでは、十分も闘っていられないと、ヤムチャはクリリンが早く現れるのを待った。

「おう、またおめえとかい。少しは強くもなったのかねえ?」

独歩は克己に笑いながら話しかける。その表情も態度も敵だとは思えない柔らかさだった。しかし、克己は厳しい表情を作ったまま、警戒していた。

「あんたは一体、何を考えているんだッッ!!」

克己は大きく怒鳴る、独歩はそれに対して、克己が驚くようなことを言った。

「おいらあ、もう年もとった、眼も片方なくした、そして…弱くな

った。そう思わねえか？全盛期の力、今の理合…それが欲しいんだ。そんな夢みたいな話をよお、叶えてくれるってんだぜ？そりや乗るに決まってるぜ！そういうことだ」

克己は呆然とした。それと同時に、怒りで体が震えていることに気がついた。おかしいと、それはあまりにも自分勝手であると、克己という男は、養父である独歩のその考えに激怒した。

「あんたは間違っているッ！あんたが強くなるのも、年をとって弱くなるのも、全ては自然の摂理だッ！！それを自分自身の思い描いた幼稚な夢で、ぶっ壊そうとしているのがわからんかッッ！！」
独歩の眼が鋭く光る。

「ああん？武道家ってのは、常に強くなることだけを願うもんだろお？まして、この俺は空手界の神と言ってもいい男だぜ？それを自分の門下生に負けましただ？高校生の少年にひけをとるなんてことが、この先にあつたら、おいらあ…そんな自分が許せなくなっちゃうんでね。…それじゃ、そろそろ始めよおか」

独歩はそのまま、右手を上段、左手を下段に構えた。いわゆる天上天下の構えというものである。この構えと非凡な才能、そして努力で築き上げてきた空手。

「それが間違っているんだッ！負けたら強くなればいい！今のあんたは視野が狭いぞッッ！！」

克己は中段の上下に手を揃えて、腰を低くして構えをとった。2人の愚地が向かい合う。共に天才と呼ばれる2人が、空手という名の、そして空手界最強最大の親子喧嘩を始めた。

第25話：強き者

「ダッツー!!」

地面を強く踏み込み、克己が上段突きを独歩の顎めがけて打ち込む。
「あらよつと」

独歩はそれを軽く回し受けて受け流し、そこから腕を弾かれて、出来た隙に正確に拳をぶつけにいった。

「そらあああ!!」

ドドドドド、克己の胸を破壊するかの如く、拳が打ち込まれていく。岩をも砕く威力を持つと言われる、独歩の一発だが、それを何発も受けていた。

「おいおい、空手つてのは一瞬の勝負だぜ？隙が生まれるつてのは、まだまだ話しにもな……ツツ!!」

独歩の体がくの字に曲がって、後ずさりながら悶絶をする。しかし、追い打ちをかけるように克己の爪先が喉を貫く。

「ゲツ……!!？ハアアア……!!」

独歩はその場に尻餅を着いた。克己は喉を貫いた足をゆっくり下ろして地につけると、独歩に向かって怒鳴るように言った。

「あんたは弱いぞ!!自分の技術に溺れ、一空手家の技術を侮り、技術を軽んじて、そしてあんたは地にひれ伏して居るんだ!!」

独歩は克己をじつと見ると、そのままゲホッと一回咳き込みながら立ち上がった。そして、同じく天上天下の構えをとり、克己に何も言わずに闘う姿勢を見せた。

「うわあああ!繰気弾ツツ!!」

グンツ、とヤムチャの手のひらから球体が現れる。それを指を使い器用に操り、剣八を攪乱するように、辺りを飛び回る。

（くっ……、このまま時間稼ぎがどのくらい出来る!）

剣八に繰気弾がヒット&アウェイのように、繰り返し剣八にぶつか

つては離れていた。鬱陶しそうにする剣八は、一瞬だった。それを当たった瞬間を捕まえて、体に押しつけるように潰した。

「ッ！？おい…なんでだよ…ここまでのちからの差って…」

つまらなさそうにヤムチャを睨み付ける剣八。刃こぼれをおこしている刀をヤムチャに向けながら剣八は言った。

「おい、俺はふざけるのはあまり好きじゃねえんだ」
ザンツッ！！

ヤムチャは肩から胸にかけて急に熱を感じた。視界が揺れる、目の前には滲んだ風景しかなく、剣八はどこにもいなかった。

「（いてえ…。俺ってやつぱり弱いんだな。ハハ…、クリリンと一緒にになってこんなことやらなけりや良かったかも。無理だつてわかってんのに、いつも負けるのに、戦ってる…。…そうだ。戦ってるんだ！弱いからどうした！！まだ界王拳も使ってねえ！！）」
立ち上がりながら、ヤムチャは腹の底から声をあげた

「更木剣八いいい！！まだ終わってないぞ…」

後ろにいた剣八がピクツと体をゆらす。そしてヤムチャの方を見てニヤツと笑うと、刀を抜いた。

「ハ―ハツハツハ―！！いいじゃねえか！！そうだもつと殺し合いを楽しもうぜツ！！」

「うおおおお！！界王拳！！！！」

二人の気と霊圧がぶつかり合う。どちらとも言えぬタイミングで二人が激突した。

「…良いじゃねえか！その力の全てで俺を殺しに来いッツ！！」

ヤムチャの凄まじいスピードで繰り出される攻撃を受けながら、剣八が吠える。

「くっ！その油断が命取りになるんだぜ」

ピクツと剣八がその言葉に反応を見せた。その瞬間、ヤムチャの突きが剣八の眼帯を貫いた。それと同時に消える剣八、そしてヤムチャは眼を見開いたままその場に固まった。いつの間にか、剣八が自分の後ろに、しかも先程とは桁違いの威圧感をはなっていた。

「油断？俺は獲物相手に油断なんてしたことないぜ？わざと力を抜いてやってんだ。そうしねえとてめえらとの殺し合いが楽しくなくなるからな…。興ざめだ」

剣八の気配がどんどん遠のいていくのを感じながら、ヤムチャは薄れゆく意識の中でポケットに手を入れた。

「…最後だ…。ウエポンARM…【13トーンボール】」

剣八が僅かに動く、真下の地面から巨大なトーンボールが出たのを回避したのだ。剣八はヤムチャの方を向くと刀を振り上げた。

「てめえ、わざと生かしてやったんだ。死にたいなら殺してやるよ」その言葉にヤムチャは力無く笑うと、黙って眼をとじて、また力無く剣八に返した。

「まだ…終わっちゃ…いない」

それと同時に剣八の足下から12のトーンボールが一気に飛び出した。防御すら間に合わない剣八はそのまま砂煙のなかに姿を消した。

「ダメか…、出血し過ぎ…た…な。ハハ…また死ぬのか…」

ARMを握る手から力が抜けた。

第25話：強き者（後書き）

更新をずっとしてませんでしたね。

申しわけございません。また合間を見てこつこつと更新していきたいと思っています。

第26話：修羅を超える者、そして…

「ほう、魔王遠呂智を討つと…？それがどれほど茨の道になるかわかっているのか？」

本多は目の前の曹操を見定めるように睨んでいる。しかし、先程から話していても、曹操の言葉にも目にも何の迷いも見えないでいた。「この世を治めるのに簡単な道など存在はせん。それは平和な時代も戦乱の世も変わることはない…」

本多は曹操の話聞いて、目を見て、空気を肌で感じて、この男の器を知った。この男は本気で遠呂智を討つつもりでいる。それは曹操の周りにいる男達も同じだった。このように怯えも迷いも見せない目で…。

「（ほう…このもの達なら或いは）」

本多はその場から立ち上がった。

「良いだろう！！だが…この俺と立ち会え！そして貴様達の力を…俺に認めさせる…！！」

脇に置いてある武器をとった。それは本多の巨体とほぼ同じだけの大きさがあり、常人なら例え両手でも扱えぬだろう物である。

「さあ、どうする」

先ほどとは比べものにならない殺気が部屋に立ち込めている。

「おもしろい。俺がやらしてもらおう」

曹操の脇にいた八雲が一步前に入る。

その瞬間、八雲から溢れ出した殺気が本多の殺気とぶつかり、肌では感じない風が吹いた。

「本多殿の武器では狭い部屋は不利になる。外に出よう」

八雲が背を向けて、部屋から出ようとした瞬間。

「問題ない！！！」

本多がその巨大な武器を横一線に振り払った。

「ツツ！！！？曹操！！！」

八雲が一瞬で曹操の下へ行き、刃を受け止めようとした。

「まずい…」

八雲は自分が何をしても自分ごと曹操の首がハネられると理解した。

「『スタープラチナ！！』 時を止めるおお！！！」

承太郎が時を止める。

八雲と曹操の首に触れるか触れないかの位置に刃はあった。

「悪いが、少し転んでもらうぜ。オラァ！！」

椅子を押し倒し、難を逃れた。

再び動き出した時、周りの風景が変わった。

「かわしたか…、そうでなくてはつまらんがな。八雲殿、これで広さは関係ない」

今の一振りで部屋を吹き飛ばしたのだ。

八雲もそれには驚きを隠せないでいる。

「まさか、ここで修羅を超える男に逢えるなんてな…」

修羅とそれを超えた男が向かいあっている。

「こんな空気感じたことがない…、指一本動かすのにも覚悟がいる」
傍らで見守る趙雲も気を緩めれば吐いてしまいかねない重圧を受けていた。

趙雲がそうなるのなら、無論周りの兵士たちは既にその場を離れたり、倒れる者が続出した。

「さて…、本気でやらせてもらう。手加減はできないぜ」

八雲が拳を握った。

「こちらもそのつもりだ…」

本多も戟を構える。

先に動き出したのは八雲。

地面を蹴り、本多から戟の間合いを潰しにかかる。

それを迎え討つように、片手で戟を振り抜くが、既に間合いを潰した八雲は軽くかわした。

「疾いなッ…だが！！！」

本多が掌低を繰り返す。

「ちっ…」

流し手で掌低の軌道を逸れさせ、八雲はもう一度地面を蹴り上げた。

その場で前方宙返りのように一回転をしながら、かかと落としを本多の肩に決める。

「もう一撃…！！！」

それとは別に高く振り上げられた逆の足も連続で決めた。

「まだ終わらないぜ！！！」

両肩に乗った足を本多の首に固定すると、八雲は大きく体を捻った。が、八雲の体はそのまま宙に止まった。

「軽いな…、枝のような足、それが細いツルとなり首に巻きつく。それだけだ」

本多が腕を高く振り上げた。

「重い一撃を見せてやろう！！！！！」

本多の全身が地に沈む

「ちっ…！！！」

とつさに圓名流“金剛”を使う八雲。

それをさらに腕でカバーをした八雲の上に腕が振り下ろされた。

「がっ…はあッ！！！！！」

真下に叩きつけられ、一メートル跳ね上がった。

「もう一撃分返す！！！」

本多の拳が八雲の顔面を狙う。

八雲はまだ地面に体がついていない、このままではモロに拳が顔面に決まり、地面との衝突は免れない。

「くっ…おおお！！！！！」

八雲が目の前の拳を避けるように頭を後ろに逸らした。しかし、そ

の動きは拳の軌道から外れるわけではない。

八雲の頭が地面に付く、それとほぼ同時に本多の拳が八雲を捉えた。しかし、本多の拳は地面にめり込んだだけで、その間に八雲の顔はなかった。

急に前に体が傾く本多、八雲が一瞬で腕の関節をとったのだ。

「すごい。本多の拳をあのまま受けていたら、確実に死んでいた。それを八雲殿は自らの頭を先に地面に付けて、直後の本多殿の拳をかわすと同時に伸びきった腕の関節を手足を使つてとったなんて……」趙雲は2人に別次元の何かを感じた。そして自らもその次元へと行きたい、そんな衝動に駆られていた。

本多は取られた関節を力ずくで振り払うと、八雲は抵抗せずにそのまま間合いをとった。

「ほう、武術ではかなわぬか……」

本多は潔く素手では八雲が優れていることを認めた。

「そうでもないさ……。あんたは何ともないみたいだが、こっちはそんなことないんだぜ」

八雲の両腕は腫れ上がっていた。本多の一撃を受けて折れたのだ。

「貴公の全力の技をもつてすれば、結果は違っていたのだろうがな」

「バレてたか……、味方になる人に使う技じゃないんでね」

しばらく2人の睨み合いが続いた。

本多が笑い声を上げた。

「お主等の武勇気に入った。本多平八郎忠勝ここに誓おう！！曹操の傘下にくんだり、神轟に力を貸そう！！……」

場の空気が一気に緩んだ。

その場に座り込む八雲、ため息をつく趙雲、なにも変わらない曹操と承太郎……。

しかし、それは一瞬で終わった。

1人の兵士が本多の陣に駆け込んできた。

その兵士はすでにボロボロで、その後ろには同じく血だらけのアランがいた。

「で、伝令です！！本陣が敵の襲撃を受け、ほぼ壊滅！！衛生兵ならびに負傷兵以外は全滅と考えられます！！！」

「ドモンや真田達はとうしたんだ！！！」

承太郎が珍しく声を荒げた。

「ドモンは師匠の足止めをしてるが、長くは保たねえだろう。真田は後からなだれ込んできた兵達の相手だ！そちらもドモンと同じ。克己とヤムチャはわからねえ…。クリリンには援護に向かわせたさ」

アランが応える

「そうか、アランはどうやってここに来たんだ」

承太郎は焦る気持ちを抑え、冷静にアランから必要なことを聞き出す。

「ARMだ。一度ここには来たことがあってな、一度来たところなら一瞬で飛べるんだ」

承太郎は先ほどの兵士とアランを見る。

「一度に何人まで飛べる」

「俺様が絶好調なら1000や5000楽勝だが…、今はせいぜい100程度だな」

「そうか…」

承太郎が考え込む。その横にいた曹操がついに動いた。

「よかるう。アランよ、お主は今から承太郎と趙雲、そして本多を連れていけ。本多は選りすぐりの将を10人頼む」

その言葉に承太郎がすぐに反論する

「相手の勢力は遥かに上だぜ。そんな少数でいつてどうにかなる相手じゃない」

「アランよ…、今そなたが100人連れていけば、そなたもタダでは済まぬのだろう」

曹操は静かな目でアランを見る。

「…ああ、魔力が尽きる」

「そなたにはまだやらねばならぬことがある…。さあ、至急準備するのだ！……！」

舞台はまた本陣へと戻る…。

第27話：奮戦

「痛えなあ……。俺が油断してたのか」

砂煙の中から立ち上がる影は、鈴を鳴らしながら歩き去っていった。

「くっ…流石に数で押し切られるか」

見事な槍捌きで敵をなぎ倒しながらも、あまりの多勢に無勢な状況に趙雲も焦りを隠せないでいた。

「この軍勢には指揮官がいるはずだ。そいつさえ倒せば…!!!」

趙雲は急に後方へ飛び退いた。

その直後、趙雲の居た場所に何かが落ちてきた。

「よけやがったか、指揮官は俺だぜ」

地面に刀を突き刺した赤髪の男が現れる。

「そうか、ならば話しは早い!!!この趙子龍が御首頂戴いたす!!!」

趙雲が槍を棒きれのように軽々廻して構える。

「来いよ!!!護挺十三番隊六番隊が副隊長!!!阿散井恋次が相手だ」

「克己。俺はよお、お前のことを空手の完全な姿だと言ったがなあ

…」

独歩は克己との間合いは変えずに歩き始める。

どちらとも不用意に近づけば打たれる間合いにいた。

「今さらだ!!!なにが言いたいのですっ!!!」

「お前が完全なのは空手だけなんだぜ?」

独歩の意味深な発言にも克己は動かずにいた。

「あなただつてそうだろう。自らの生涯を空手に費やしてきた男が、他に何を極める」

独歩が急にズカズカと克己に向かい、直線という最短距離で間合いを詰めた。

「不用意だ!!!」

克己が前足で最短最速の廻し蹴りを独歩の顔面目掛けて仕掛ける。

「俺とおめえの空手は五分と五分だがな。克己よ、おめえは死を知らないだろう」

独歩は克己の蹴りをこめかみへの直撃を許さず、少し頭を下げ、打点をぶれさせていた。

「それがそんなに大事なのか!!」

予想外の事態にも怯むことなく、克己は技を繰り出そうとする。

「そして、おめえの最大の欠点は…」

独歩の手が弧を描く、廻し受けだ。克己の技を全て無力化した。

「欠点を知らないことだ!!!」

ド、ドドドドツツ!!!!!!

克己の体が衝撃に何度も揺れた。

「へえ。耐えきるのか」

克己から拳を引き、構えを解きながら独歩が言った。

「恨むなよ。俺達がやってんのは、試合じゃねえ…死合だ」

独歩は拳を緩めて腰まで引いた。

「おめえにこの拳を伝えたかったんだけどな」

独歩の拳が腰から消えた。空気を切り裂く音と共に拳は克己の顔面に沈んでいた。

「あばよ。克己」

独歩はそう言つて、克己の目の前から姿を消した。

それを見送るようにして意識のない克己の体が立っていた。

それより半刻前…

東方不敗が一人、城に立ち入り中を探索しようとしていた。そこで一枚の扉を開こうとしたとき

「おい、待てよ。勝手に人んちに入り込んでんじゃねえ」

アランが東方不敗の後ろに現れた。

「わしの後ろを取るとは…」

「出ていけと言ったんだ！！！」

アランが振り向く寸前の東方不敗に拳を振った。

「たわけ！！！効かぬわ！」

アランのエアハンマーを声の衝撃で相殺した。

東方不敗はそのまま腰布を使い、アランに鞭のように反撃を仕掛ける。

「ちっ…、避けきれねえ！！！」

腕に布が絡みつく、東方不敗はそれを引っ張ると、アランはそれに抵抗するように引っ張り返した。

「どうした。老体相手に力比で負けるか！！！」

東方不敗の言葉通り、アランの表情には余裕がなかった。

「くそじじいが…。」

しばらくの間、東方不敗とアランは布を間に挟み、一步も動きを見せずにいた。東方不敗の顔には余裕が、アランには険しい表情が浮かんでいる。

「どうした、動かぬのか？動けぬのか？」

なおも余裕の東方不敗が布を引く手に力を込める。アランは引かれる力に抗うように、引かれる力とは逆方向に力を加える。

アランはその膠着状態を利用した、一つの賭を待っていた。あと少しで博打を打てるとこまで来ていたが、それを見切ったように、東方不敗が動いた。

「その飾りを使う気だろうに、お主の考えなど見え透いておるのだ」
東方不敗が力を緩める、アランが引いていた力に身を任せて、布ごとアランの側へと近づいたのだ。咄嗟の出来事に打つには少し早かった博打を、打たざるを得ないアランだったが、ARMを使わずに、東方不敗を迎え撃とうとした。

「だから、貴様は阿呆なのだあ！」

それすらもよんでいたのか、それとも百戦錬磨の経験値なのか、東方不敗はアランの攻撃を受け流し、顎に一撃、無防備になった腹に一撃を加え、後ろに跳び退いた。

「流派東方不敗が奥義…超級霸王電影弾ッッ！！」

一度、大きく身を捻ると、アランに向かい突進をしてきた。それがただの突進なら、アランも回避することを選んだが、東方不敗の周りを何とも言えぬ、光が包み込み、光の周りにあるもの、当たったものがことごとく吹き飛んでいったのだ。

「化け物が…、ガーディアンARM！！ウンディーネ！！」

床から水が湧き出る、それが人の形をとり、東方不敗の行く手を阻もうとするが、一瞬で水塵と化し、何事もなかったかのように、消える。いや、アランが消したのだ。東方不敗の目の前に直撃を待っていただけの男は、いつの間にか視界の隅へ移動しようとしている。そして、東方不敗はそれを横目に壁へと突っ込んだ。

「自業自得だ…。ぐふっ！」

避け切れていなかった。アランは挟まれた脇腹を押さえ、壁の土と埃が舞い上がっているのを見つめていた。

「どうする…」

アランは痛みに堪えた表情で、右手のホーリーARMとその隣のガーディアンARMを見比べる。魔力には余裕がない。ARMの数はそれほど使っていないものの、東方不敗との力比べや、個々のARMを全力で使ったこと、そして脇腹の深刻なダメージがアランの魔力を蝕んでいた。東方不敗が立つてくるのなら、治癒へ魔力を廻している余裕はない。アランは治まりつつある粉塵を凝視していた。

第28話：趙雲VS阿散井恋次

アランは粉塵が収まりつつある壁を見ていた。自らの技に飲まれた東方不敗の姿を確認したかったのだ。だんだんと大きく抉られた壁が姿を現す。そこには東方不敗の姿はなかった。

「逃げた…か？くっそ、どうする。このまま助っ人に行ってもクソの役にもたてねえ…」

アランは自分のARMが飾る手を見つめていた。

「そうか、これなら力を貸せる！ディメンションARMアンダーター…！」

アランがその場から消える。すると、一つの影が天井から降り立った。

「ふふふ、そうだ、仲間を集める！全員の息の根を止めてやる」

東方不敗はそう言いつと、まだ荒れる城門前へと姿を消した。

趙雲と恋次が睨み合う。

周りの敵兵が趙雲を狙うが、それを軽くあしらいながら、恋次の動きに集中する。恋次は笑っている。まるで戦うことを楽しんでいるように。遠呂智の敵将にはその傾向が強いように思える。

「来ないなら、こっちから行かせてもらうぜ！！」

恋次の姿が消える。後ろに殺気、趙雲が振り向き様に槍を振り回し、間合いを作らせない。振り回される槍に、恋次は咄嗟に飛び退く、続けざまに趙雲は槍を突き出すが、それを刀で打ち落とす。

「お前出来るな！見せてやるよ、咆えろ！蛇尾丸！！」

恋次が趙雲の槍すら届かぬ位置で、刀を振るう。構えはするものの、完全に外れた間合いでは、警戒しようもない。

「ぐっ！！？」

突然肩に力が掛かる。そして肩が熱くなる。切られた、と趙雲は理解した。視界の外からの攻撃、刃が食いつくように、肩に刺さって

いた。恋次が握った柄を引くと、刃もそれに連動するかのように恋次の下へ飛ぶ。いや、それは何片にも分かれた刃が筋のようなもので繋がっているのだ。それが、恋次の下で次第にくつつき、一本の刀に成る。

「俺の蛇尾丸は血が好きなんだ。簡単には死ぬなよ」

「刀が形を変えた？この者…、一体！」

恋次が間合いを詰める。横一線に趙雲の胴を狙う、が、趙雲は槍を縦に受け止める。恋次の刀が槍と接触した部分から、真つ二つに折れる。しかし、趙雲には刀を折った手応えがなかった。

「もう一発ッ！！」

「何ッ…！！」

いつの間にか、正面に刀の先端が刺さっていた。また、それは刀の一片だけである。筋と刀片の連なった物が、趙雲の背を一回りしている。まるで鞭がしなり体に巻き付いたように見える。

体を捻り、腹に刺さった刀を抜き、槍の柄を使って、恋次を打つ。

「ちっ、浅かったか」

退がる恋次と共に、趙雲も後ろに飛び退いた。

「奇妙な刀を使う…。やっかいな刀だな」

幸いに腹の傷は浅い、肩も動かせない程の傷でもなかった。まだやれることはある。と、趙雲は槍に両手を添えて、静かに構える。八雲に使った、一撃必殺の突きの構えだった。

「良いぜ、戦いつてのはどちらかが倒れるまで」

槍の間合いの外、普通の刀では余計に届かぬ距離だが、恋次のそれは違う。そして、恋次には一瞬で間合いを詰めることも可能だった。全ての勝利条件が恋次に味方をしている。趙雲からしては、どうにか一撃だけでも与えたい。

恋次は刀を高く構え、力強く振り下ろす。鞭のように大きくしなる。先程の勢いとは全く違い、振りがぶった腕が見えなかった。

趙雲は地を踏みしめて、大きく飛び出す。それでも、槍の射程範囲には届かぬことは分かっている。頭上に刀が迫る。目の前には勝利

を確信した恋次の顔が見える。あと拳一つ、頭髮に重みを感じる。刀が落ちてきているのだ。咄嗟に片手を離れた。肩を槍と一緒に突き入れる。半身になり、その分、槍が伸びた。頭髮に感じた重みが肩に落ちる。骨を断ち、肉を切り裂く音が耳に届く。しかし止められない。槍の先端に手応え、それが何の手応えか趙雲は分からなかった。首に生暖かい物が飛ぶ、視界の半分は闇に落ちた。見えているものも全てが歪む。ただ、槍の先を前に進めることだけに全てを注いだ。槍は前に進む、腕を、肩を、胴体を、腰を、足を全て前に出した。そこで槍が止まる。

恋次の腹部と胸部の間に一本の棒が伸びる。僅かに右にずれたお陰で急所は貫かれなかったものの、息をするたびに喉が灼ける。装束が何かを吸って、重くなっていくのが分かる。

「こ、の…野郎…」

目の前の青い模様が入った鎧を身に着ける男を睨む。男の顔半分は赤く血に汚れ、刀身が肩を抉り、胸まで深く入り込んでいる。男の鎧が次第に赤くなっていく。

お互い、しばらくのあいだ、そのまま睨み合っていた。

「視界が…霞んできや…がった」

一言一言を発するたびに、喉が灼ける。鉄の濃い味が口にこみ上げてくる。足がガクガクと震え始め、恋次は膝をついた。目の前でも、固い物が地面を打つ音がする。同じくあの男も崩れ落ちたのだろう。突然、胸が痛み出した。ズルズルと槍が体から引かれているのだ。なぜ？と恋次の頭によぎった言葉の答えが、すぐ目の前にあった。では、何が地面を叩いたのだろうか…。それを歪む視界で探した。見覚えのある何かが、地面に横たわっている。それが自分の斬魄刀だと分かったとき、頭の上で声がした。

「拙者…の勝ち…だ」

目の前に突き出される槍、柄が斜め上を向いている。その先には手、腕…そして赤く汚れた肩、その先には血を受けて、赤く光った目が

あった。それを見た瞬間、視界が全て闇に飲まれた。体が後ろに傾く、地面がある。薄くなる意識の中に、恋次は何かが落ちる音、そして、倒れる音を耳にした。

第29話：止まらぬ男

「次から次へと！」

ドモンが遠呂智の兵達を蹴散らしていく、どこかにそれを統べる将がいるはずだが、出くわさないのを見ると、他の者達が相手しているのかもしれない。既に、辺り一面はドモンの拳により倒れた者がひしめいている。

「ドモンさんッ！ここより、城門付近に敵が！ヤムチャさんと克己さんが相手しているけど、正直、ヤムチャさんの方は持ちこたえられない！」

クリリンがドモンの側に降り立つ。しかし、二人の下へ行くには、この敵陣に穴を空けなくてはならない。

「ドモンさん！目をつぶって！」

「なにっ!？」

言われるがままに、目を瞑る。

「太陽拳！！今だ！」

目を開けると、周りの兵は全員目を押さえて丸くなっている。一度、クリリンがドモンに対して使った技だった。クリリンがすぐに目の前にかめはめ波を放つと、敵が吹き飛ばされて、道が空く。

「急がないと、ヤムチャさん……」

男はとりあえず、歩いていた。城門前で戦い終えて、眼帯を付け直す、特に行く当てもなく、ただ強い者を求めて、争乱としている中を鈴の音をならし歩く。

「とりあえず、城の中に入るか……」

鈴の細い音を鳴らして、目の前の城を目指す。

「あ、あんたは!？」

剣八は、立ち止まった。さっき戦った男と一緒に居た小男が目の前

に現れたからだ。背筋から何かが駆け上がって来るのを感じる。もう、こんなに戦いたいと、体が疼き始めている。

「ヤムチャさんは……」

「ああ、斬ったぜ」

小男の後ろにも男が立っている。鋭い良い目をしている。だんだんと体が押さえを聞かなくなってくる。刀を握る手にも自然と力がかもつていた。

「よくも……。許さんぞお」

「どうでも良いケドよ、来るなら二人で来い。その方が楽しめる」
小男の後ろにいる男の目つきが変わる。剣八の挑発を受けたようだ。
「舐めるなよ。クリリン、挑発に乗るぞおお！」

「ドモンッ!？」

ドモンと言われた男が、飛び出してくる。それに遅れて、クリリンと呼ばれた小男も動き出す。背中を駆け上がったものが頭に響く、もうこうなったら抑えられない。剣八も地を大きく蹴った。

真正面から迫ったドモンは、突然動き出した剣八と交錯する。素早く、拳を放ち、引くと同時に関節を曲げて、肘打ちを決める。が、剣八は止まらない。ドモンの二の腕を掴むと、剣の柄でドモンの顔を殴打する。

「ぐあっ！」

どれだけの力で殴られたのか、大きく吹き飛ばされる。

突然、剣八の後ろに殺気があらわれる。クリリンだ。両手を組み、大きく上に振り上げて、それを振り下ろす。しかし攻撃を片腕で軽く受け止めた剣八は、クリリンを真似るように手を振り上げて、それをクリリンに叩きつけた。

地面がひび割れるほどの勢いで打ち付けられたクリリンは、衝撃で体が跳ね上がる。それを体を捻り待ちかまえていた剣八は、腕を大きく振りかぶり、拳でクリリンを打ち払う。

「なんだ、お前らもあの男程度なのか？」

悠然と立つ剣八が、吹き飛んだ二人をつまらなそうに見る。遠くで二人が苦しそうに立ち上がっている。剣八は溜息を吐いた。

「ぐ、化け物か…」

ドモンがふらふらと立ち上がると、少し離れた場所に飛んできたクリリンを見る。立ち上がるうとしているが、既に満身創痕のダメージを負っているのだろうか、力無く倒れる。

「クリリン、大丈夫かッ！」

「に、げろ…ドモン、あいつは強すぎるぜ…。お、俺がどうにか足止めする…」

クリリンが震える足で踏ん張り立ち上がる。すでに闘える体ではないのが、見て取れる。たった二発だった。ドモンもあと一、二発を受ければ、立ち上がることが出来ないかも知れない。その間に、剣八を仕留められる可能性は極めて低い。

突然、クリリンがはじかれたように後ろを振り返った。気配、そういうには禍々しい程の気配が、現れた。

「誰かと思えば、馬鹿弟子といつぞやの男か」

腕を組み、苦しむ二人に殺気のこもった冷たい目を向ける、東方不敗。

「き、さまああー!!…ぐっ」

ドモン、怒りに身を任せ、動き出そうとするが、負ったダメージが体を止める。

「ふん、滑稽だなドモン。どうした？動けぬか？」

後ろには剣八、前には東方不敗が立ち塞がる。

「前門の虎後門の狼ということか…。万事休すだな」

クリリンが呟く、その瞬間ドモンが大きく動き出した。傷む身体を叱咤し、三人から大きく間を空ける。

「逃げる気か？」

誰もがそう思った。クリリンでさえも、絶望に支配された顔を見せるが、ドモンは叫んだ。

「東方不敗マスターアジア！！俺と決着を着けたくば、付いてこい！！」

どんと離れていくドモン、それを見る東方不敗の顔には笑みが浮かぶ。

「バカでも分かる挑発などしおつて…。しょうがない、久々に稽古にでも付き合つてやろっ」

東方不敗がドモンを追いかけ始める。その場に残ったのはクリリンと剣八、クリリンは近づいてくる剣八を向く。

「ドモンさんがわざわざ戦力を分散してくれたんだ…。俺一人でどこまでやれる…」

次第に距離が縮まっていく二人。先に動き出したのはクリリンだった。

「ほう、そうじゃないとな、楽しめないぜ」

猛スピードで向かって来るクリリンに対して、刀を横に薙ぐ。クリリンの体が真つ二つに裂かれ、クリリンの姿が消えた。

いつの間にか、剣八の目の前に脚が現れる。顔面に蹴りを喰らい、軽くのけぞった。

「…おもしれえ事ができるじゃねえか、ん？」

正面を見直したとき、クリリンの姿がなく、そして見えるのは沢山の閃光だけだった。光が一気に剣八を包み込む。同時に爆発が体を揺さぶる。後からいくつもの閃光が飛んできては、それが剣八に襲いかかっていた。

「はあ、はあ、どうだ」

残像拳で攪乱し、一気に責め立てたクリリン。すでにボロボロになった体で、限界の攻撃を試みせた。もう、かめはめ波一発も出せないまでに気を使い果たした攻撃の結果を待つ。

爆風により、舞い上がった砂塵が収まり始める。それが、収まりきる前に気を感じ取れるクリリンに答えが訪れる。

「…そんな、神様ひどいぜ」

力尽きたクリリンはその場に膝をつき、収まる砂塵から何事もなく現れる剣八を見つめる。ただ剣八の装束が所々焦げ付いたり、破れただけだった。一矢報いることすら出来ない実力差だけが、クリリンを取り巻く。

「弱い…な。さっきやり合った男と、同程度のもんか」

刀を肩に掛け、剣八はクリリンの前に立つ。しばらく、クリリンを見る剣八の目には、失望の色さえ顕れている。

刀がクリリンの首にひやりと付けられた。肌からも感じ取れる程、刃こぼれした刀。しかし、剣八が振れば、それはどんな刀よりも切れる。

「（すまない、みんな…。）」

死を覚悟し、目を固く閉じ、心の中で呟くクリリン。死ぬのは何回経験してもなれるモノではない。眼前にある死は、今までのどの死よりもハッキリと濃厚な感じがした。

首に付けられた刀が、肌に押し込まれる感覚。死ぬ瞬間は一秒一秒が長い。皮膚を通過し、脈に届くまでハッキリと分かる。どこまで意識を保っていられるのだろう。と、クリリンは考えた。

しかし、それ以上、刃が動かなかった。それと共に、爆発音、そして爆風がクリリンの前で巻き起こる。驚き目を開けると、離れた場所に剣八の姿があった。状況が飲み込めない。確かにある浅い首の傷。一瞬前までは確かに目の前に居たはずの剣八、そして一瞬前までは無かった真上のでかい気。クリリンが空を仰ぎ見る。

「…な、あ、ああ」

見覚えのある姿、白いマント、白いターバン、緑色の肌、その全てをクリリンは知っていた。

「ピッコロ!!!?」

一度、クリリンと視線が交じる。それはすぐに剣八へと向けられたが、クリリンは頷いた。

「任せる…か。はは、本当に神様って言っても、元神様だけど、来てくれた」

ピッコロが地に降り立ち、剣八と向かい合う。クリリンに感じ取る気は五分と五分。剣八にとっての本当の殺し合いが始まった。

第30話：殺し合い

「やっと、手応えのある奴が来たな」

剣八が嬉しそうにピッコロを見る。それに対してピッコロは特に動かない。何も喋らず、ただ剣八の方を見ているだけだった。

「ピッコロ…、お前なら勝てるのか？」

クリリンは傷だらけの体で、少し離れた場所で二人を見ていた。二人の力は全くの互角、しかし、ピッコロはまだ修行用の重いターバンとマントを着けている。ピッコロに分があるだろう。

急に、威圧的な気がクリリンの肌を突き刺した。剣八が剣を一振りしたのだ。たったそれだけのことで、クリリンにとっては驚くばかりである。あれに斬られていたら、一溜まりもなかっただろう。冷や汗がクリリンのこめかみを伝った。

「始めようぜッ！殺し合いを」

風を切る音と共に、剣八が消える。その消えた直後にはピッコロとの間合いを詰めていた。

クリリンとドモンを一撃で沈めた拳が、ピッコロを襲う。が、寸前に手で受ける。すかさず、剣八が刀を持った手を振るう。

その瞬間、ピッコロは身を引き、ギリギリでかわすと、連続でパンチを繰り出す。剣八がそれを受けることなく、体に浴び、吹き飛んだ。

「ふん、余裕だな」

ピッコロが初めて口を開いた。剣八がムクリと起き上がると、嬉しそうに笑った。

「いちいち、攻撃を防いでいたら殺し合いが楽しめねえ…」

「ふん、その言葉の余裕が何処まで保つかな」

次はピッコロが先に動き出した。真上に高く飛び上がり、手を開いて、それを剣八に向ける。光弾が幾つも飛び出し、剣八へ襲いかか

った。

クリリンの時とは比べ物にならないほどの爆発が、一帯を飲み込む。
チリン…と、微かな鈴の音をピッコロの耳が捕らえた。

「ちっ！」

突然、ピッコロは後ろに向かって、振り向き様にエネルギー弾を放った。そこにはいつの間にか、剣八が居た。エネルギー弾が正確に顔を捉えようとするが、寸前のところで剣八が顔をそらし、眼帯をかすめるにとどまる。

「ぐっ…あ！」

ピッコロが顔を顰める。肩に刀が突き刺さっていた。刀が引き抜かれると、緑色の血がこぼれる。

剣八が引き抜いた刀で続けざまに斬りつけようとするが、それを察知したピッコロが後ろに飛び退く。

「ちっ、飛べたとはな…」

貫かれた肩からは依然、血が滴り落ちていた。剣八の方はというと、顔にある眼帯を気にしたように触って、何かを確かめていた。

「壊れちまいそうだな…。替えが少ないんだぜ」

先程、眼帯をかすめた攻撃のせいか、剣八の霊力を吸う力が落ちてきている。

「そろそろ、本気を出したらどうだ？」

吸う力が落ちてきたからか、先程より、多少気（霊圧）を高めた剣八に対して、ピッコロが言い放った。

「そうだな、こんなに楽しめる殺し合いを適当に終わらせんのも馬鹿げてる」

グッと眼帯を握るとそのまま引きはがす。一気に霊圧を解放した。

「さあ、再会だぜ」

剣八が動こうとした瞬間に、ピッコロが気弾を放つ。地を蹴り、一気に間合いを詰めようとする剣八は、それをかわそうともせずに突っ込んでくる。

「くだらねえ」

まるで、虫を叩き落とすかのように、軽く手ではじいた。ピッコロはまだその状況に反応できていない。剣八のスピードがピッコロの反応速度を凌駕しているのだ。

ピッコロが気づかぬ間に、距離を詰めた剣八が、片手で軽く刀を振り抜く。そこで初めて、気配だけを察知したピッコロは、急所を避けるように体を捻った。

「うおお…おお!？」

ピッコロの腕が飛ぶ。その時でも剣八は攻撃の手を緩めずに、刀を翻し、もう一度ピッコロに斬りかかる。刀の軌跡をかるうじて読み切ったピッコロは大きく飛び退いた。

「なんだ…、こうなるとつまらねえな」

さも、うんざりしたかのように、剣八は飛び退いたピッコロを見る。一つ溜息を吐くと、剣に付着した緑の血を振り払う。

「やめだ。腕を失った奴と戦ったところで、何一つ楽しめやしねえ」

「…まさか、ここまでとはな。この俺も油断した」

ピッコロの言葉に、剣八が反応する。すでに、片腕のない状態で、まだ戦う気なのだろうか、言葉の意を掴みあぐねる。その様な仕草でピッコロを見つめていた。

「悪いが、俺も本気を出す」

片腕で、ターバンとマントをはぎ取った。霊圧すら上手く察知出来ない剣八だったが、先程とは違うことだけは分かる。しかし、相手は片腕だった。それが決定的に剣八の戦闘欲を冷やす。

「かああああ!」

ピッコロがうなり声を上げた。剣八は一瞬呆気にとられる。先程、確かに切り落とした腕。確認すれば、しっかりと地に転がっている。まだ、生々しく、血を溢れさせているのだ。が、目の前のその者には、現在両腕が存在している。断たれた腕から生えてきたのだ。

「どうした、俺はまだやれるぞ」

何事も無かったかのように、ピッコロは両手を構える。一拍遅く、

剣八は反応するが、一瞬を平気で動き回る戦いに、一拍はあまりにも遅すぎた。

激しい爆発が巻き起こる。爆力魔破が辺り一面を先程の数倍の爆発力で飲み込んでいく。地形が変わる程の威力、これですらピッコロは地上を破壊しないように力を抑えて放っていた。

暫くの間、砂煙が巻き起こる。その砂煙も今までの比ではないのだから、収まるまでには長い時間がかかった。

「ほう、立っているか、さすがだな」

収まる砂塵の中に、一人の影が浮かんでいた。それが段々とハッキリしてくる。すでに装束はボロボロに破け、肌には火傷や焦げが目立っている。

「あー、効いたぜ。今のはよ」

剣八は笑っていた。それにはピッコロも驚いていたが、剣八の負っているダメージは一目瞭然、立っているのがやつところだろう。たった一度の判断の遅れだけで、ここまでの圧倒的差を生み出す。ハイレベル同士の戦いだっただけ。

「俺はお前ほど、甘ちゃんじゃない。しっかりと仕留めてやる」

ピッコロが、先程の自分に対して、興ざめた様子を見せた剣八に、今度は逆の立場から、逆の言葉を吐く。そして、もう一度手を構えると、小さな光弾を幾つも飛ばす。

それに対しては、素早い反応を見せてかわしていく剣八だったが、先程のようなキレが今の動きにはない。無限のように飛ばし続けるピッコロは、逃げる剣八を追いかけ続ける。

「俺が力尽きるより先に、貴様の逃げる体力が尽きる方が早い！残念だったな！！」

その言葉を聞いた瞬間に、剣八がピタリと動くのをやめた。ピッコロは諦めたのか、という考えが脳裏をよぎるが、剣八の表情を見て、それが間違いだと知る。

「飛び回りやがって…、めんどくせえな。だから、悪いが一撃だ」
剣八は笑いながら、刀の切っ先をピッコロに向ける。そして、地を

蹴ることもなく消えた。ピッコロが素早く反応する。

「見切っているぞ！」

真上を向くと、刀の柄を両手で持ち、振りかぶっている剣八が落ちてくる。すでに、ピッコロとの距離は一メートルもない。その顔に向かって、手を広げたピッコロが、魔光砲を放つ。明らかにピッコロの攻撃が早かった。しかし。

顔が吹き飛ばされていた筈の剣八が、刀を振り切り、既に切っ先は下を向いていた。魔光砲も顔ではなく、両肩に襲いかかっていた。

「な……んだと！」

ピッコロがぐらついた。体を斜めに深く斬られている。血が吹きこぼれる。何とか、力の抜けた脚に、意識を総動員して倒れまいと踏みとどまる。

そのピッコロを驚いたように、見つめる剣八は、それ以上、攻撃の意志がないかのようだった。今ならあと一振りで仕留められる、その状況で刀を下ろしたまま腕を上げようとしない。

「知ってるか？刀つてのはな、片手で振るより、両手で振った方が早いんだぜ」

「はあ、はあ、それで俺の魔光砲を切り裂いたか……」

剣八がニヤリと嬉しそうに笑う。

「さあ、続きだ。倒れかけで動けないお前と、腕を上げることの出ない俺で……」

剣八の両肩は、今ので許容量以上のダメージを受け、動かない。対する、ピッコロも立っているのがやっとで、大きな傷口からは止めどなく血が溢れ出ている。

先に動き出したのは、ピッコロだった。震える二本の指を立て、額に押し当てる。続いて、それを待っていたかのように、剣八が肘から先で刀を持ち上げて半身になった。

「貫くことくらいなら、わけねえんだ」

剣八の言葉に今度はピッコロがにやりと笑う。

「ああ……俺もだ」

半身から勢いを付けて刀を突き出す、剣八。

ほぼ同時に、突き出す様に二本の指を剣八に向けてピッコロが叫んだ。

「魔貫光殺砲ツツ!!」

一本の鋭い光線の周りに渦が巻いている特殊な光線が指から放たれた。それと同時に、勢いを付けて腕を突き出したために、傷口から夥しい量の血が吹きこぼれた。

「（あー、なんだ、どうして空が見えんだ？そうか倒れたのか…。じゃあ負けたのか）」

剣八は仰向けに倒れていた。腕を動かそうにも、肩から下がまるで何もなかったかのように感覚がない。上体を起こそうにも、体が軋むように悲鳴を上げて、鉛のように重く動かない。かろうじて動かせる首で左右を見ても、その限られた視界には、荒れた大地だけしか写らない。

段々と、感覚が激痛となって戻ってくる。右胸がやたらと痛む。戻ってきた感覚で肘から先を動かし、確かめてみると、指が体内に入っていた。

「（穴が空いてやがる…）」

最後の一撃を胸に受け、力尽きて倒れたのだと、やっと思い出せた。土を踏むような、音が聞こえる。誰かが近寄って来ている。しかし、その方向へは物理的に首が回らない。声だけが耳に届く。

「こいつがそうだな」

聞いたことのない声。

「ええ、そうです。」

聞いたことがある。名前は…、忘れた。小男だったな。

「こいつ、死んでんじゃないか？」

「いえ、微かに気が残ってます」

「そうか、ホーリーARM癒しの天使」

最初に聞こえた声の主が、何かを体にかざしてくる。そこから温か

いモノが広がった。

「ひええ、また暴れないですかね」

「大丈夫だ、体の自由が利くほど回復させてない」

声の主の通り、痛みはあるし、体の自由も利かない。ただ、血は止まっているし、穴も塞がりかけていた。

「なに…してんだ？」

まだ、穴を空けられた肺のダメージも消えていないのだろう。息をすると、鋭い痛みを感じるが、声を出してみた。

小男の方が視界の隅っこでビクツと驚いている。もう一人も驚いているのが雰囲気で分かった。

「お前、しゃべれんのか？」

小男ではない方が、驚いたように尋ねてくる。出来れば喋りたくなかった。非常に気怠い。仕方なしに手を挙げた。心なしか、肩も少し動くようになっていた。

「化け物じみた生命力だな。普通なら意識もないはずだ。まあいい、クリリン、運べよ」

「いいいい！？俺がですか？」

「当たり前だ、ロートルに無理させるな」

恐れるように、肩を掴まれる。そのまま引きずられている、そんな自分を想像して、ふいに口元が緩んだ。そして、そのまま意識はストンと闇に落ちていった。

第30話：殺し合い（後書き）

やっと、三十話です。なのに書いている自分自身、遠呂智を倒せる気がしません。（笑）もう、最初に設定した強さがチートです。なにしてるんだ、二年前の俺！

一応、最後は決めてあるんですがね。そこまで持っていくのに時間掛かるんです。

良ければ、皆様の希望する対戦カードをメッセなどで教えて頂ければ、物語の進展次第で、書いて行きたいと思います。

ここまで読んで頂き、大変感謝です。

まだまだ、覇者の印、天帝王記共に続きます。

それでは、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8791b/>

覇者の印

2010年10月10日07時56分発行